平成元年度

埋蔵文化財緊急発掘調査概報

吹田53号須恵器窯跡

吹田城跡推定地

垂　水　遺　跡

1990年3月

吹田市教育委員会

序

吹田市教育委員会では昭和49年度から文化庁及び大阪府教育委員会の御指導を受け、国庫補助事業として、埋蔵文化財の発掘調査を行ってまいりました。本年も数々の成果をあげ、ここに発掘調査事業の成果をまとめることができました。こうした調査の結果、多くの新資料が発見され、市民・研究者の目にふれることができるようになり、地域の歴史を考える上でも、有益な資料を提供し続けています。

調査・研究によって蓄積されたデータ・資料については、今後、保存と活用を継続的に行い市民の歴史研究資料として充分に機能するものと期待するものです。

本年度は、吹田53号須恵器窯跡・吹田城跡推定地・垂水遺跡の発掘調査を行いました。吹田53号須恵器窯跡では、古墳時代後期の須恵器窯窯体部について調査を行い、須恵器生産の実態を示す資料が得られ、吹田城跡推定地では、今後の発掘調査に対する指針を得ることとなりました。垂水遺跡では、弥生時代の溝・中世の畦畔等を検出し、前者は、丘陵下の調査で初めて検出した弥生時代の遺構であり、後者は条里制下における水田経営の実態を示す重要な資料といえます。

文化財の保護・調査は、市民一人一人の協力なしでは不可能なものであり、本年も多くの市民の御支援を得ました。末筆ながら厚く御礼申し上げます。

平成２年３月

吹田市教育委員会

教育長　長　光　達　郎

例　　言

1．本書は、平成元年度国庫補助事業として実施した、吹田53号須恵器窯跡、吹田城跡推定地、垂水遺跡の緊急発掘調査をまとめたものである。

2．発掘調査地点は次のとおりである。

第１次　吹田53号須恵器窯跡　吹田市原町３丁目４番１号

第２次　吹田城推定地　吹田市高城町1357番、他

第３次　垂水遺跡　吹田市垂水町１丁目747―８（第１期）

第４次　垂水遺跡　吹田市垂水町１丁目747―21（第２期）

3．発掘資料の整理作業は、吹田市青山台２丁目５番地、青山台小学校内文化財分室において実施した。

4．本文は調査担当者、増田真木・西本安秀・田中充徳及び文化財担当藤原学が分担して執筆した。各章の執筆分担は以下の通り。

第１章　増田真木

第２章　西本安秀・藤原　学

第３章　増田真木

第４章　西本安秀・田中充徳

5．図中の方位は磁北を示し、標高はＴ．Ｐ．（東京湾標準潮位）を示す。

6．本文中の遺物番号は図番・挿図とも統一した。縮尺は須恵器甕・横瓶は１：５、木器は１：６、その他の土器については１：４に統一した。

7．資料の整理にあたっては増田智美、加々美幸一、縄井美穂、長田俊彦、富永智治、櫻井和佳子、冨士田克彦、田中乾三の参加を得た。

8．発掘調査において、中田共栄・鎗山和夫・鎗山公秀・鎗山久恵・森　重房・松倉みどり・沖野真理子氏をはじめ多くの方々の協力を得た。明記して謝意を表します。

発掘調査参加者名簿

調査主体　吹田市教育委員会　教育長　長光達郎

調査指導　大阪府教育委員会文化財保護課　係長　瀬川 健・係長　石神 怡

調査担当　吹田市教育委員会社会教育課　増田真木・西本安秀・田中充徳

調査補助員　飯島哲也

目　　次

第１章　平成元年度埋蔵文化財発掘調査の契機……1
第２章　吹田53号須恵器窯跡の調査……4
第３章　吹田城跡推定地の発掘調査……18
第４章　垂水遺跡の発掘調査……20

挿　図　目　次

第１図　発掘調査地点……2
第２図　吹田53号須恵器窯跡・調査地周辺図……4
第３図　調査区平面図……6
第４図　土層断面図……7
第５図　窯跡内遺物出土状況……8
第６図　出土遺物実測図(1)……10
第７図　出土遺物実測図(2)……11
第８図　出土遺物実測図(3)……12
第９図　出土遺物実測図(4)……13
第10図　出土遺物実測図(5)……14
第11図　吹田城跡・推定地調査地周辺図……18
第12図　調査区平面図……19
第13図　土層断面図……19
第14図　垂水遺跡調査地周辺図……20
第15図　垂水遺跡調査区平面図……20
第16図　土層断面図……21
第17図　弥生時代溝平面図……22
第18図　出土土器実測図……24
第19図　トレンチ配置図……25
第20図　土層断面図……26
第21図　畦畔検出状況平面図……26
第22図　出土土器実測図……26
第23図　出土木器実測図……27

図　版　目　次

図版１　吹田53号須恵器窯跡

図版２　吹田53号須恵器窯跡

図版３　吹田53号須恵器窯跡

図版４　吹田53号須恵器窯跡

図版５　吹田53号須恵器窯跡出土遺物

図版６　吹田城跡推定地

図版７　垂水遺跡（第１期）

図版８　垂水遺跡（第１期）

図版９　垂水遺跡（第１期）

図版10　垂水遺跡（第２期）

図版11　垂水遺跡（第２期）

第１章　平成元年度埋蔵文化財発掘調査の契機

吹田市では昭和49年度以来、文化庁、及び大阪府教育委員会の指導のもとに埋蔵文化財包蔵地における小規模な開発工事に対して国庫補助事業として緊急発掘調査を実施してきた。

昭和51年度からは開発の進行の著しい垂水町３丁目一帯に所在する垂水南遺跡を中心に発掘調査を継続し、遺跡の範囲や包蔵状況の確認等に大きな成果をあげた。昭和55年度からはさらに市内各所での開発行為の増大に対応するために市内の遺跡全般に対して事業を拡大し、吉志部遺跡、蔵人遺跡、吹田32号須恵器窯跡、七尾瓦窯跡周辺地等の調査を実施し、多くの成果をあげた。

平成元年度は吹田53号須恵器窯跡、吹田城跡推定地、垂水遺跡の３遺跡について実施した。

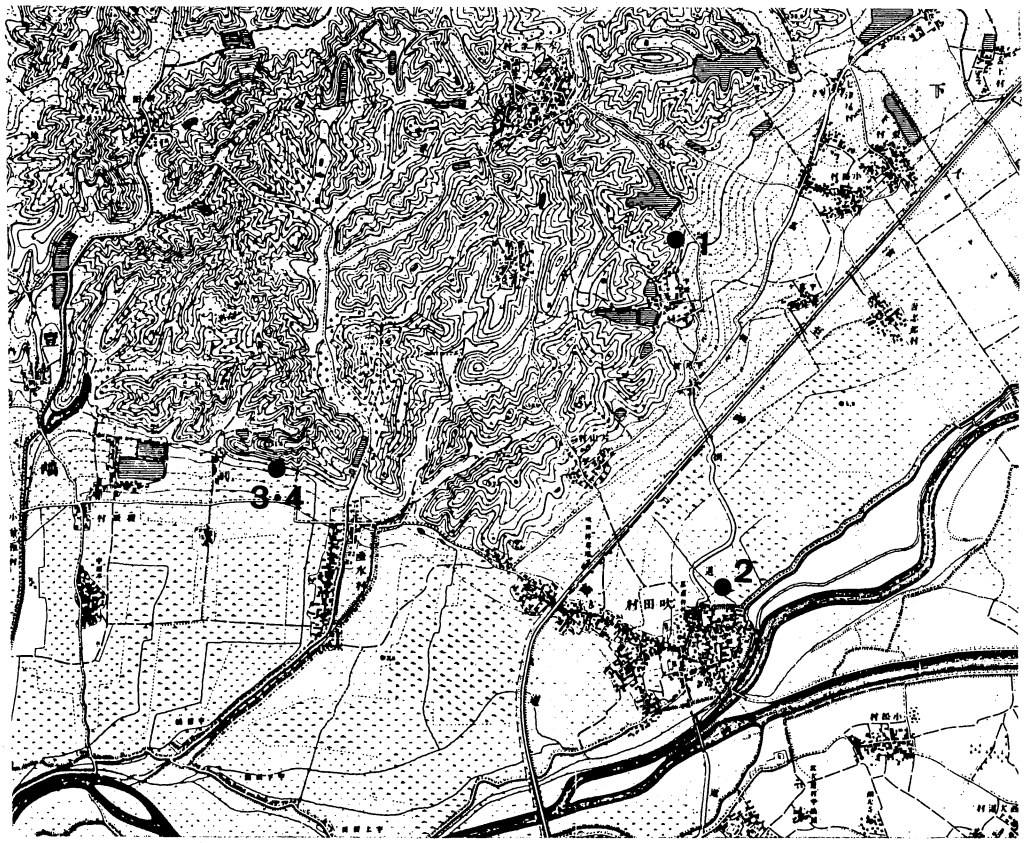
吹田53号須恵器窯跡（以下、ＳＴ53とする）は、吹田市原町３丁目４番１号に所在する。個人住宅の増築時に多数の須恵器が出土したために、市教育委員会に土地所有者の中田共栄氏から通報を受け、文化財担当者が現地で確認したところ、須恵器の窯跡であることが判明した。

本窯跡はこれまで周知の埋蔵文化財としては周知されておらず、工事に伴って確認された新規確認の窯跡である。

千里丘陵は丘陵北西部（豊中市域）、及び東南部（吹田市域）一帯を中心とした５世紀末から７世紀前半にかけての大規模な窯業地帯であり（千里古窯跡群）、現在、千里丘陵全体では80ケ所近く、吹田市内では55ケ所の窯跡が確認されており、原町一帯も竜ケ池を中心として窯跡が集中して支群を形成している。竜ケ池一帯は丘陵縁辺部に位置し、窯跡群は早い操業段階のものであるが大半の窯は消滅しており、その実態は明かでない点が多い。従って、ＳＴ53は窯体のかなりの部分は早い時期に削平されたと考えられるが、大半の窯跡が消滅した本市においてはきわめて重要な資料であり、保存について慎重な対応が必要であることから、その状況を確認するために、緊急に発掘調査を実施した。

吹田城は史料には水田城とも出るが、建武三年（1336）の周防重家軍忠状（『大日本古文書』所収「吉川家文書」）等に水田城がみえるほか、水田での合戦も記されている。この時期には吹田城に誰が拠っていたかは明かではないが、永亨年間（1429～1441）には、吹田河内守重通が拠ったと伝えられる（『摂津誌』）。

吹田城は千里丘陵の東南端に築かれた山城と想定されるが、江戸時代中期には既にその存在は伝承しか残されておらず（『摂津誌』）、城の状況を伺い知る史料は残されていない。亘節氏は『吹田志稿』において、寛正二年（1461）の『崇禅寺田園目録』には石浦城と西庄城の２城が記されており、寛正二年、文禄三年（1594）、寛文三年（1663）、天和三年（1683）、延宝七年（1679）の各検地帳、及び延宝七年『吹田村絵図』等の検討から城に関する字名は現在のアサヒビール株式会社吹田工場（西の庄町）とその東方の吹田市立第三小学校（高城町）付近に



第 1 図　発掘調査地点（1：40000）
1.　吹田53号須恵器窯跡　　2.　吹田城跡推定地　　3・4.　垂水遺跡

認められることを明らかにし、吹田城の位置についてはその両者の説があるが、吹田市立第三小学校付近については洛西法幡寺の下司等がいた所で、吹田城はアサヒビール株式会社吹田工場付近に存在したと論じている。

しかし、亘氏の論じたアサヒビール株式会社吹田工場一帯は工場の建設等の早くからの開発によって状況が大きく変わっており、その後は大規模な開発も少なく、部分的に行われた試掘調査や立会調査においても考古学的な所見は得られていない。一方、昭和63年度に吹田市教育委員会では天満宮所蔵文書（明治初期）の調査を実施したが、その中に吹田城を記した史料が確認され、その史料に認められる地割の状況を市内の小字図等と比較検討した結果、吹田市立第３小学校の所在する高城町の字城ケ前の地点に史料と一致する特別な方格地割を認めた。この史料は吹田城の位置を考える上で重要な史料ではあるが、一帯の状況も大きく変わっており、断定するためには考古学的な調査によるしかなく、一帯での調査が待たれた。このため、市教育委員会では史料の示す高城町の吹田城推定地については、城跡に関連する遺構の遺存する可能性があることから、周知の埋蔵文化財包蔵地として扱い、開発に対処することとした。

そして、今回、高城町1357番、他において個人住宅の建設が計画されたが、当該地は史料にみられる城の中心部分に近い地点であることから、地下の埋蔵状況を確認することが必要であると考えられ、発掘調査を実施した。

垂水遺跡は垂水町１丁目から円山町にかけての、東西600m、南北400mの範囲に展開する。

遺跡は昭和の初期に住宅開発にともなって弥生土器の出土が確認され、遺跡の存在が明かとなったが、昭和30年すぎから民間の総合グランドの建設にともなって遺跡の西半部が大きく削平され、遺跡の大半は十分な調査を受けることなく壊滅的な破壊を受けた。

垂水遺跡に対する本格的な発掘調査は昭和48年から51年にかけて関西大学と吹田市史編纂室、吹田市教育委員会によって実施され、弥生時代後期の住居址４棟、掘立柱建物跡、焼土坑、土壙墓等を検出するとともに、後期を主に前期から後期にかけての多量の弥生土器が出土し、垂水遺跡は千里丘陵の東南端に位置する弥生時代の高地性集落として大阪湾岸に展開する遺跡群の中で重要な位置を占めることが明らかとなった。また、弥生時代以外にも室町時代を中心とする中世の墓跡、小祠跡、竈跡等を検出しており、歴史時代にも継続する複合遺跡であることが確認された。

その後、垂水遺跡に対して円山町における住宅の建て替え等にともなって実施された試掘調査、及び立会においては明確な遺構や遺物の出土は認められず、遺跡は垂水神社の境内地として残される遺跡の南端部のみに旧状を残すだけと考えられる。

しかし、昭和55年から56年にかけて実施された垂水神社東方の丘陵裾部分における寮建設にともなう事前調査において溝、土坑、柱穴等の遺構を検出するとともに、弥生時代から室町時代にかけての遺物を確認し、丘陵下における長時間にわたる遺跡の展開を明らかにするとともに、平安時代後半期の遺物の中には、垂水神社と関連する寺院の存在を想定できる資料も認められた。昭和62・63年度には丘陵南辺の平坦部において個人住宅の建設にともなう調査が実施され、現地表下1.5～2.5m前後で条里地割の展開方位に合致する中世期の溝を検出し、その下層、現地表下2.5～3.3m前後において弥生時代に遺物包含層を検出している。

特に昭和62年度調査ではⅣ様式を主とする多量の弥生土器が出土し、丘陵上で調査された弥生時代集落盛期前半の様相を示す資料として、垂水遺跡弥生時代集落の発展の様相を知る上で大きな成果をあげた。

今年度は、昭和62・63年度調査地点に近接する垂水町１丁目747―８、及び同747―21の２ケ所において、個人住宅の建て替えが計画され、両地点とも遺構・遺物の存在が十分に予想されることから調査を実施した。

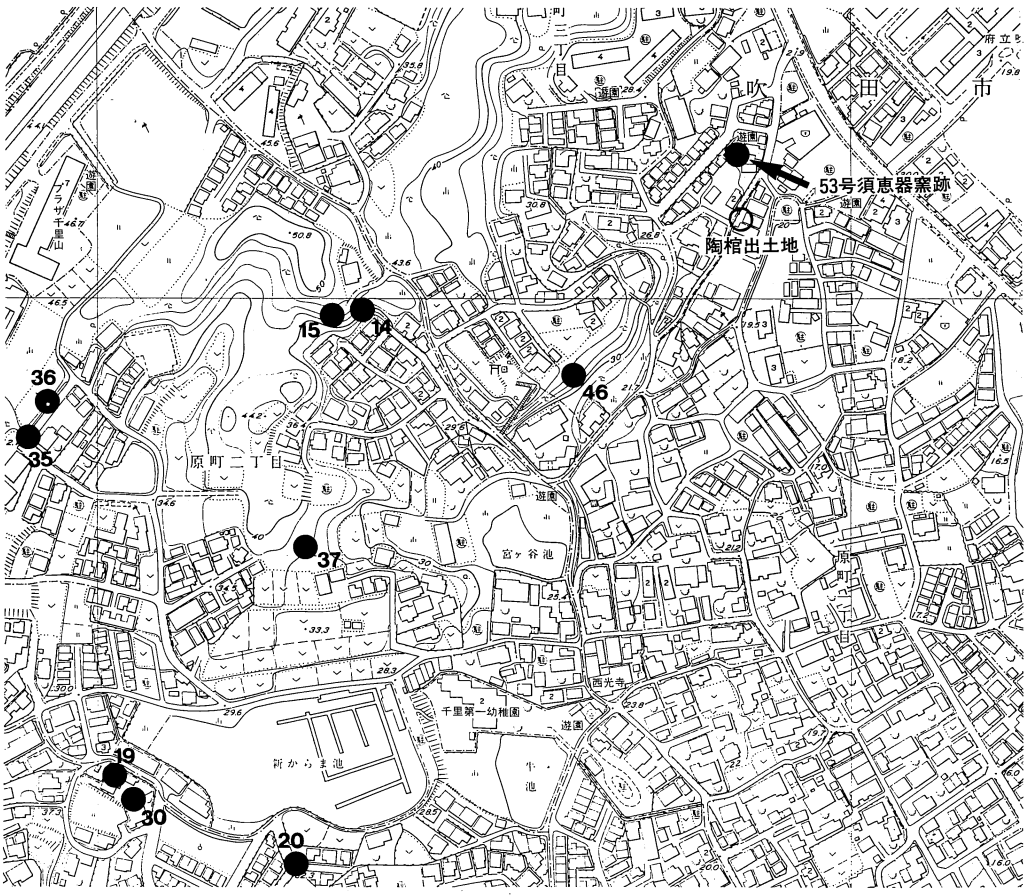
第２章　吹田53号須恵器窯跡の調査

1.　位置と環境

吹田53号須恵器窯跡（ＳＴ－53と略称する。他の窯跡についてもこれに準ずる）は吹田市原町３丁目４番１号に所在する。現在では周辺はすっかり宅地化され旧地形をうかがうことは困難であるが、昭和32年の地形図によれば千里丘陵東南部の東北にのびる小尾根の先端の北斜面、標高22m付近に立地している。

千里丘陵は大阪府の北部から淀川の沖積平野に突出する大阪層群の丘陵地で、東西10km、南北８kmの規模をもつ。洪積丘陵独特のなだらかな起伏に富み、粘土・砂・礫によって構成されている。窯の構築に適した地形と良質な粘土はこの地における窯業生産を促す大きな要因であった。

古墳時代中期になると千里丘陵南東部に初期須恵器を焼いたＳＴ－32が構築され、さらに古



第 2 図　吹田53号須恵器窯跡・調査地周辺図

墳時代後期初頭には本格的に須恵器生産が開始される。千里古窯跡群吹田地区では現在55ヶ所で窯跡が確認されており、出口町・馬池・竜ケ池・山の谷・佐井寺・津志長池の７つの支群に分けられている。このうちＳＴ－53周辺の馬池・竜ケ池支群についてみてみる。馬池支群は馬池、牛池、宮谷池を中心に13基の窯が分布し、竜ケ池支群は竜ケ池を中心として６基分布している。ＳＴ－32を除くとＳＴ－40、ＳＴ－20が最古の様相を呈し、ＳＴ－37がやや新しい要素をもつ。この３基が千里古窯跡群吹田地区での須恵器生産の初期段階（第Ｉ段階）に属する。須恵器生産が最盛期を迎える第II段階になると、ＳＴ－14・15、ＳＴ－35・36、ＳＴ－19・30で２基ずつ窯が構築されている。これらは２基が同時に並行して操業されたか、連続して操業されたものと考えられる。馬池・竜ケ池支群では続く第III段階以降の窯が確認されておらず、生産を急速に終息し、他の支群へ生産の拠点を移したと考えられる。この後、釈迦ヶ池支群、山の谷支群で須恵器生産が引き継がれ、７世紀中葉に終焉を迎える。

奈良時代になると、岸部北５丁目に所在する七尾瓦窯跡で、聖武朝難波宮造宮用の瓦の生産が行われるようになった。七尾瓦窯跡は東北方向にのびる尾根の先端に立地し、北斜面に６基、東斜面に１基窯が確認されている。そのうち３基について発掘調査を行ったところ、登窯が２基、平窯が１基確認され、全て窯の構造が異なっていた。これは藤原宮造宮瓦窯である日高山瓦窯跡や平城宮造宮瓦窯である中山瓦窯跡と同じような状況であり、登窯と平窯が混在するのは、この時代の造宮瓦窯の特徴ともいえる。瓦窯の北側には西から北へ屈曲して流れる大溝があり、瓦生産と有機的に結びついていたと考えられる。

平安初期に入ると、七尾瓦窯跡の約200 m西の地点の丘陵に吉志部瓦窯跡が作られた。吉志部瓦窯跡は平安造宮瓦窯で、丘陵の南斜面に平窯11基、登窯４基の総計15窯が確認されている。窯は丘陵の上下二段に分かれて配置されており、上段には登窯が、下段には平窯が整然と並ぶ。発掘調査の結果登窯では緑釉製品を焼いたことが判明した。また瓦窯東南部で瓦製作に用いたロクロピットが検出され、さらにその南部で粘土採掘坑が多数検出された。これらの成果から東西 200m南北 200mの範囲にかなり統制のとれた造瓦工房が存在したことがうかがえる。

千里丘陵に展開した窯業生産活動は吉志部瓦窯跡をもって一旦終了し、近世になって鈴木瓦窯、武内瓦窯が作られる。以上のように、古墳時代中期以降、古代まで窯業生産の中心地として千里丘陵は重要な役割を果たしていた。一方、千里古窯跡群や七尾瓦窯跡、吉志部瓦窯跡が操業された時期の集落址について、周辺地域では未発見のため実態は把めていない。ただ若干の古墳と陶棺出土地、及び奈良末～平安初頭の火葬墓がある。

吉志部瓦窯跡のある丘陵の上方に６世紀初頭の古墳が２基（吉志部２・３号墳）、７世紀初頭の古墳（吉志部１号墳）が築造されている。吉志部１号墳の横穴式石室内から、窯壁塊の熔着した須恵器甕の破片が出土しており、須恵器工人と何らかの関係があったとも考えられている。また、須恵器窯跡群の分布に一部重なるように市内６ヶ所で陶棺片が出土している。ＳＴ－53の立地する尾根の南斜面でも土師質陶棺片が４点、須恵質陶棺片が１点、７世紀初頭の須

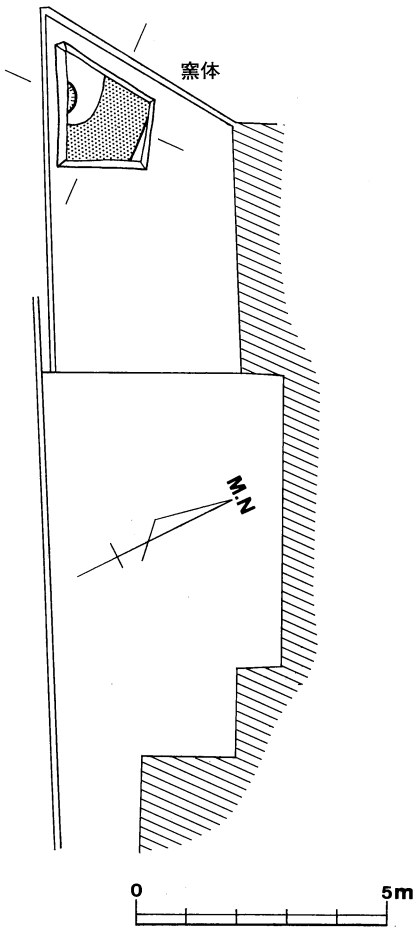
恵器を伴って出土しており、横穴または墓壙が存在した可能性がある。須恵器生産がピークをこえた７世紀初頭に窯跡の周辺に墓地が作られていることは興味深い。奈良末～平安初頭の火葬墓は吉志部瓦窯跡内から見つかった。今のところ瓦窯との関係については不明であるが、無関係であれば既に瓦生産が終焉していたことも考えられる。

以上ＳＴ－53周辺の歴史的環境について特に窯業生産に主眼をおいてみてきた。先述したようにこの生産を支えた集落等の資料は希薄であり、今後の調査に期待するところが大きい。

2. 調査の経過

発掘調査は原町３丁目４－１、中田共栄氏の住宅敷地内を対象に平成元年４月24日より５月２日にかけて実施した。敷地の制約上、台形の調査区を設定し、3.6 ㎡について調査した。まず表土と現代の攪乱層を除去する作業を行ったところ、地表下25 cm で窯壁東側上端部を認め、窯体の展開方向を確認できた。以後はこの窯体主軸に合わせて４つのグリッドを設定し、断面観察を行いながら全て人力によって窯体内の掘り下げを行った。

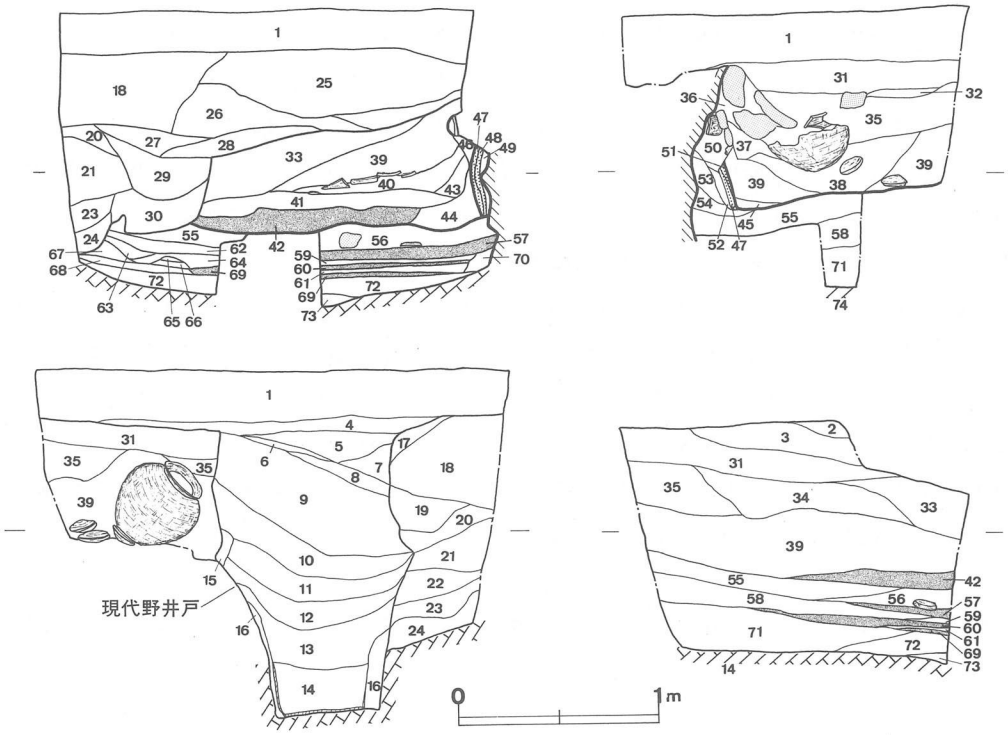
精査を続けた結果、東側窯壁は良好な状態で遺存しているが、西側は攪乱を受け遺存していないことが判明した。さらに窯の最終焼成の床面が検出され、ここで杯・甕・壺等が多量に出土した。これらを記録に止め、取り上げた後、床面の下の土層堆積状況について検討を行うため、部分的に深掘を行った。遺構の写真、断面・平面図等の記録作成の後、窯壁の保存を目的として合成樹脂の塗布を行い、５月２日埋め戻しを行って調査を終了した。



第 3 図　調査区平面図

3. 遺　　構

今回の調査対象となったのは須恵器窯跡の窯体部である。窯の主軸方位はＮ－40°－Ｗである。窯体内の断面を観察したところ、窯壁片、焼土、炭を含んだ粘質土が上部から流れ込むように数層重なって堆積しており、比較的短期間に堆積した状況を示すものである。堆積土内にはこの窯で焼成された須恵器が多数含まれていた。窯の最終床面直上には厚さ10 cm の黒色灰層が堆積していた。



1. 表土
2. 黄灰色粘土層
3. 灰色粘土層
4. 黄色粘土層
5. 黄色粘質土層
6. 灰色粘質土層
7. 黄白色粘質土層(やや淡い)
8. 灰色粘質土層(上より淡い)
9. 黄褐色粘質土層
10. 淡暗灰色粘質土層
11. 灰色粘質土層
12. 暗灰色粘土層
13. 暗灰色粘質土層
14. 灰褐色粘質土層
15. 青灰色粘土層
16. 黒灰色粘土層
17. 暗灰色粘質土層
18. 黄褐色粘土層
19. 暗灰色粘質土層(やや淡い)
20. 灰色粘質土層
21. 暗灰色粘質土層
22. 暗灰色粘質土層(上より淡い)
23. 灰褐色粘質土層
24. 灰色粘質土層(炭・窯壁焼き含)
25. 褐色土層
26. 暗褐色土層
27. 黄灰色土層
28. 淡黄灰色土層
29. 黄灰色土層
30. 暗灰色粘質層
31. 黄灰色粘質土層
32. 赤灰色粘質土層
33. 赤灰色粘質土層(焼土・炭 若干含む)
34. 赤褐色粘土層
35. 赤褐色焼土層
36. 黄褐色砂層
37. 褐色砂層
38. 淡赤褐色焼土層(粘質土)
39. 淡赤褐色土層(窯壁多い)
40. 赤褐色粘質土層(焼土・炭多く含む)
41. 暗灰色粘質土層(窯壁片・焼土多く含む)
42. 黒色灰層(窯壁塊含む)
43. 赤褐色粘質土層(上より焼土多い)
44. 黒褐色粘質土層
45. 灰褐色土層(窯壁片多量に含む)
46. 灰褐色粘質土層
47. 黄色酸化層
48. 暗灰色土層
49. 暗灰褐色粘質土層
50. 灰色土層(壁多い)
51. 灰色環元層
52. 灰褐色礫層
53. 黄褐色粘質土層
54. 黄灰色砂質土層
55. 灰褐色土層
56. 斑状淡黒色灰混りの灰褐土層
57. 黒色灰層
58. 淡灰褐色砂質土層
59. 暗褐色土層
60. 淡黒色灰層
61. 暗茶灰褐色土層
62. 褐色土層
63. 灰褐色粘質土層
64. 灰色粘質土層
65. 黒灰色土層
66. 褐色土層
67. 暗灰色粘質土層(炭・灰混)
68. 暗褐色土層
69. 淡黒灰色灰層
70. 黒褐色粘質土層(灰混)
71. 暗灰色砂質土層
72. 淡茶灰褐色土層
73. 灰色砂層

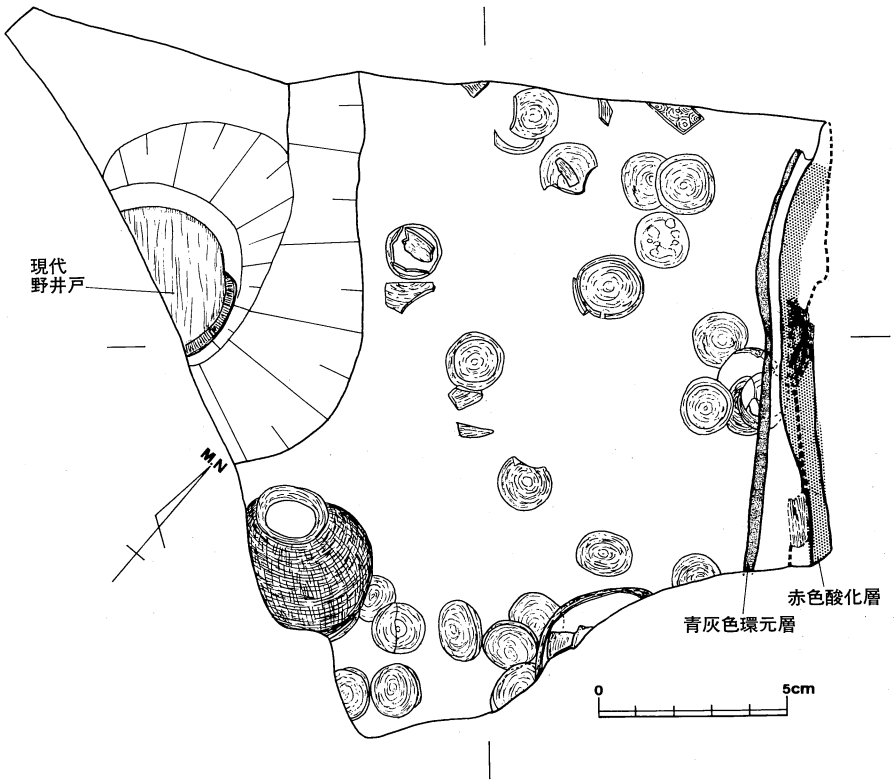
第 4 図　土層断面図

窯壁は地山を掘り込んだ壁の部分にスサ入りの粘土を貼ったもので、窯構築時の床面から現存高55 cm を測る。壁面は強い火熱のため青灰色に堅く焼き締められ、自然釉がかかり光沢をもっている。窯壁の上端の一部は地山から遊離し、窯の内側へ傾斜している。

窯壁内側の下部には貼り壁の一部が遺存し、窯壁との間には黄褐色粘質土の裏込めがあった。貼り壁は南北の両断面で認められ、現存高25～35 cm、厚さ 4 ～ 5 cm を測る。還元層の厚みが薄く、焼成温度は低かったことを示している。この貼り壁は最終焼成に伴う窯壁の改修とみられるが、遺存状況は悪く平面的に検出することは困難であった。

最終床面上には多数の須恵器が残っていた。これらの出土状況には一定の規則性は認められず、特に西端部は雑然と寄せ集められた状況を示している。遺物は杯・甕・壺等であり、杯については蓋と身をセットにして焼いているものがあり、焼成状況を推定できる資料となった。甕は焼き台として 3 個の杯を使った例が確認された。最終床面は南側ではわずかに熱を受けた痕跡が認められたが、北側ではほとんど認められなかった。床面は縦断面をみると南側が高く、次第に傾斜して北側のほぼフラットな面につながる。また、横断面をみると、中央部が低くなっている。

床面下には厚さ 2 ～ 5 cm の黒色灰層が暗褐色系の土層と互層となって 3 層に堆積していた。



第 5 図　窯跡内遺物出土状況

これらの層の下には黄色粘質土の硬質な面があり、地山と判断した。調査区北端の地山面でピット状の落ち込みを検出した。部分的にしか確認できていないが、これはいわゆる舟底形ピットと考えられる。

以上の知見から、今回の調査対象部分が窯体のどこに該当するのか検討すると、窯床はフラットで被熱の痕跡が少ないこと、黒色灰層が数層にわたって堆積していること、地山面で舟底形ピットが認められること等から、燃焼部のうち焚口に近い部分に当たるものと考えられる。

4. 出土遺物

窯体から出土した遺物は、全て須恵器であり、土師器や土製品は含まれていない。器種としては蓋杯が多く、少量の甕、そして微量の𤮔・高杯・提瓶・横瓶・壺などが含まれている。窯体内に残存した土器としては、蓋杯のセット関係を保つ完形資料がかなり数えられるほか、さらに中型甕2点・壺1点そして、横瓶・提瓶1点が完形か、それに近い資料として検出できた。これらは窯内一括資料として価値が高く、しかも窯床の推移に応じて取り上げられていて、重要な資料群といえる。以下、器種別に資料を記すが、層位的な観点からの分析は、のちの「5．結語」において行うこととし、本項では大略をのべることとする。

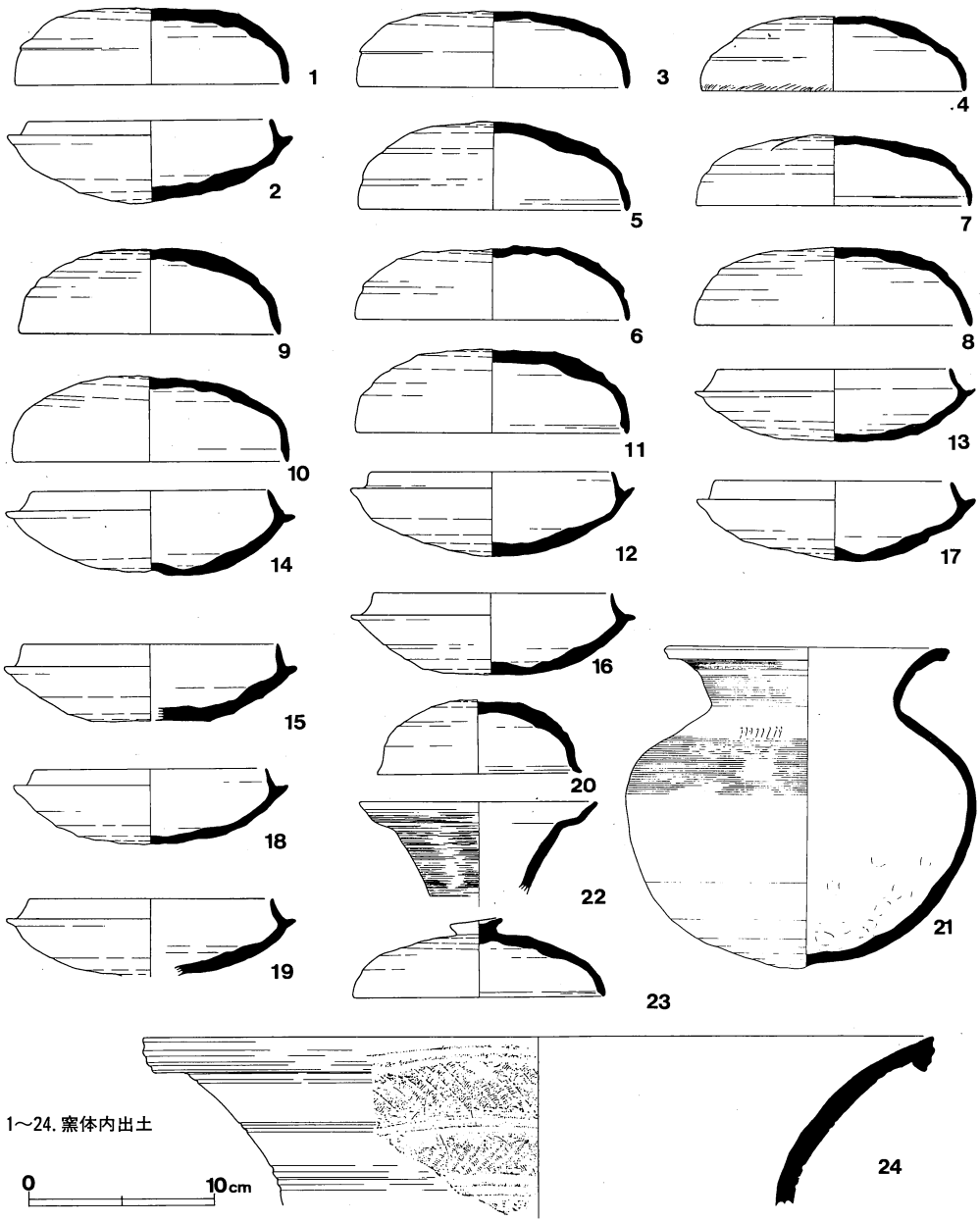
〔蓋　杯〕

コンテナ12箱分に及ぶ出土資料のなかでも最も量が多く、なかでも操業最終段階の所産とみられる最終床面、及び窯体内堆積土に含まれる一括資料があり、これらは出土状態からみても同時期性の主張できる蓋杯群である。

この蓋杯群については、図でも明らかなように、5世紀代の伝統的な遺性としての、外面天井部と体側部の界部の装飾（稜や段、凹線など）を有する旧タイプのものと、全く装飾を持たない新しいタイプのものとが半ば混在している。しかも、よく観察しないと確認できないような痕跡程度のもの(5)や、その装飾が全周に廻らず、途中で消失するものなど（3・38）がある。明らかに界部装飾を保っていても、その口端からの位置や、稜の程度、凹線の幅や深さなど、各個体にすべて差があり、安定した施紋意識によって製作していたとはいえない不安定なものである。

口端内面の端面や凹線状の装飾性は、杯蓋においては、僅か痕跡程度に残すもの（5・7・11・28・45・56ほか）があるが、その形状もすべて個体差がある。杯身ではこれに対応する立ち上がり口端縁の装飾性は殆どなく、全て丸く仕上げられており、杯蓋以上に装飾の退化が進んでいる。このような細部の不安定さは、本窯の製作時期がまさに古い手法を消去しようとする形態上の変革期にあたるためであるといえる。

その反面、同一器種間の法量の差を、器体最大径で観察すると、(明らかに焼き歪みのものは除外すると）窯体内堆積土の一括資料は14.3～15.2cmの間に収まり、その平均値は14.90cmである。最終床面一括資料は、14.40 ～15.6cmの間に分布し、平均値は14.907cmで、双方は完



第 6 図　出土遺物実測図(1)

全に一致する。また、最終床面以前の杯蓋については計測できる資料はすくないが、同一数値内に収まり、従って本窯の操業期間においては、器径上の推移を示す動きはなく、法量的には全て同一規範のなかで、製作されているとみられる。

杯身立ち上がりの形状をみると、立ち上がり内面に、指押さえによる屈曲線を残すもの（18・48・49・54ほか）と、内面立ち上がり線を完全に消したもの（2・15・29・46ほか）が

あり、最も一般的なタイプを含めて、3つのタイプに区分できる。

杯蓋の外面装飾の面でも、稜をのこすもの、凹線化したもの、装飾のないものなど、旧・新両タイプの様式に3つ程度の区分が可能であることから、これら蓋杯のセットは各々3つの細部調整差を保有しているといえ、この差は陶工の個人的なクセとみれるかもしれない。

〔甕〕

大型甕は焼き台に使用されたとみられる体部破片が若干みられたのみであるが、2個の中型甕（26・27）が完形に近い状態で検出された。図にあるように、口頸部の焼き歪みによって、窯出しされずに窯内に放置されたものとみられる。(27)には、窯詰め時に底部を支えるための杯身が敷かれたまま熔着していた。

〔提　瓶〕

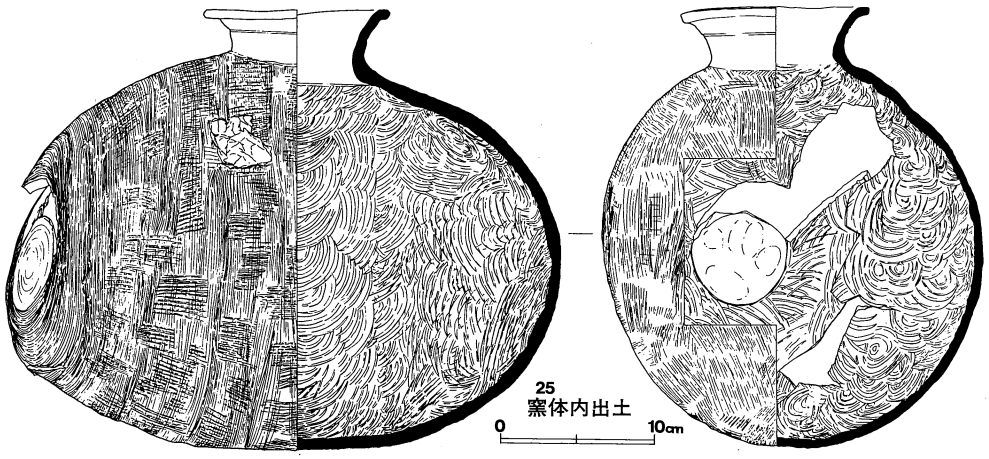
(60)が1点のみ出土した。ほかに口頸部とみられる断片が1点あるが、提瓶かどうか不明である。釣形の耳部をもつ大型のもの。

〔横　瓶〕

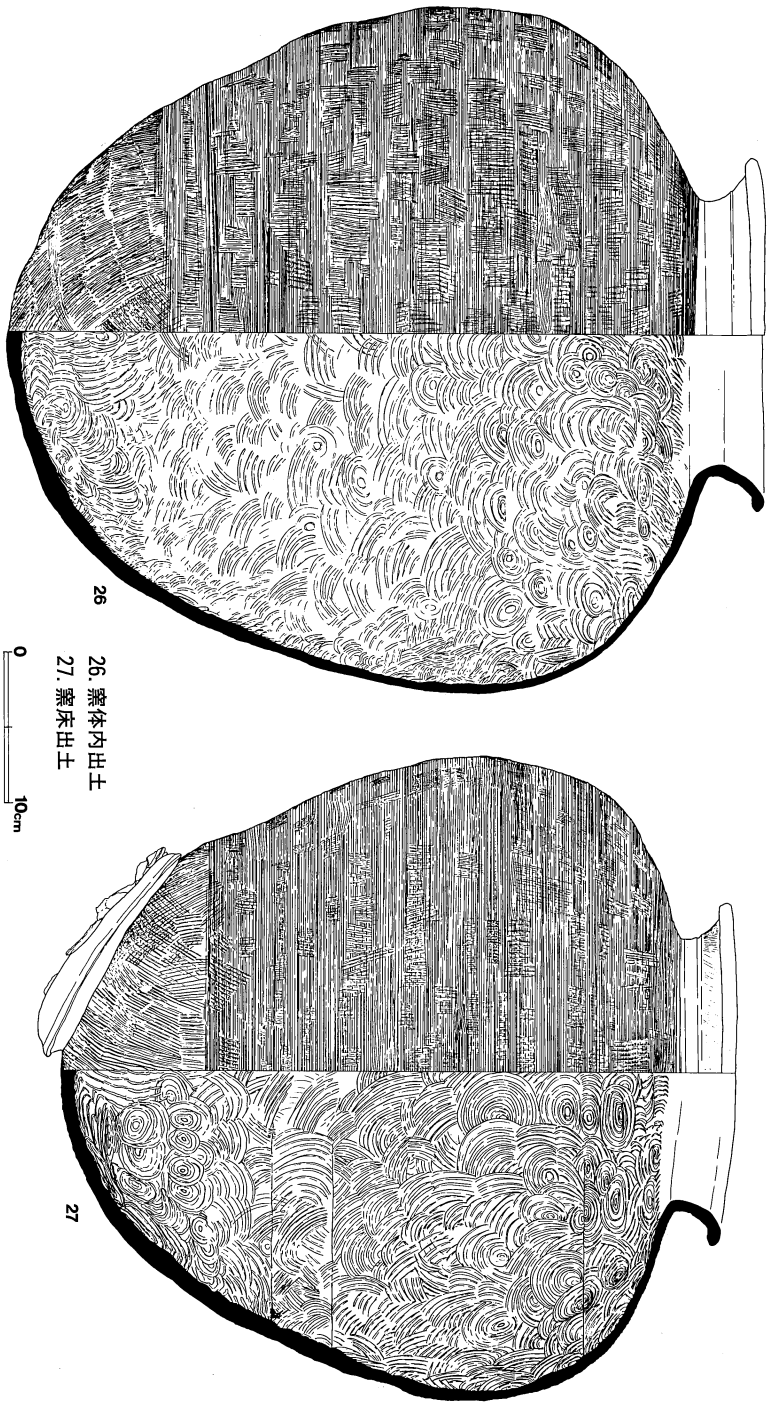
(25)は体側部が大きく焼き損じているが、大略の把握は可能な資料である。壺口縁のような簡単な口頸部をもつもので、頸部中央に1条の凹線をもつなど、甕（26・27）や壺(21)などと近似した意識で製作されている。体部も正確な俵形というより、その両側が圧縮されたような形状を呈している。

〔その他〕

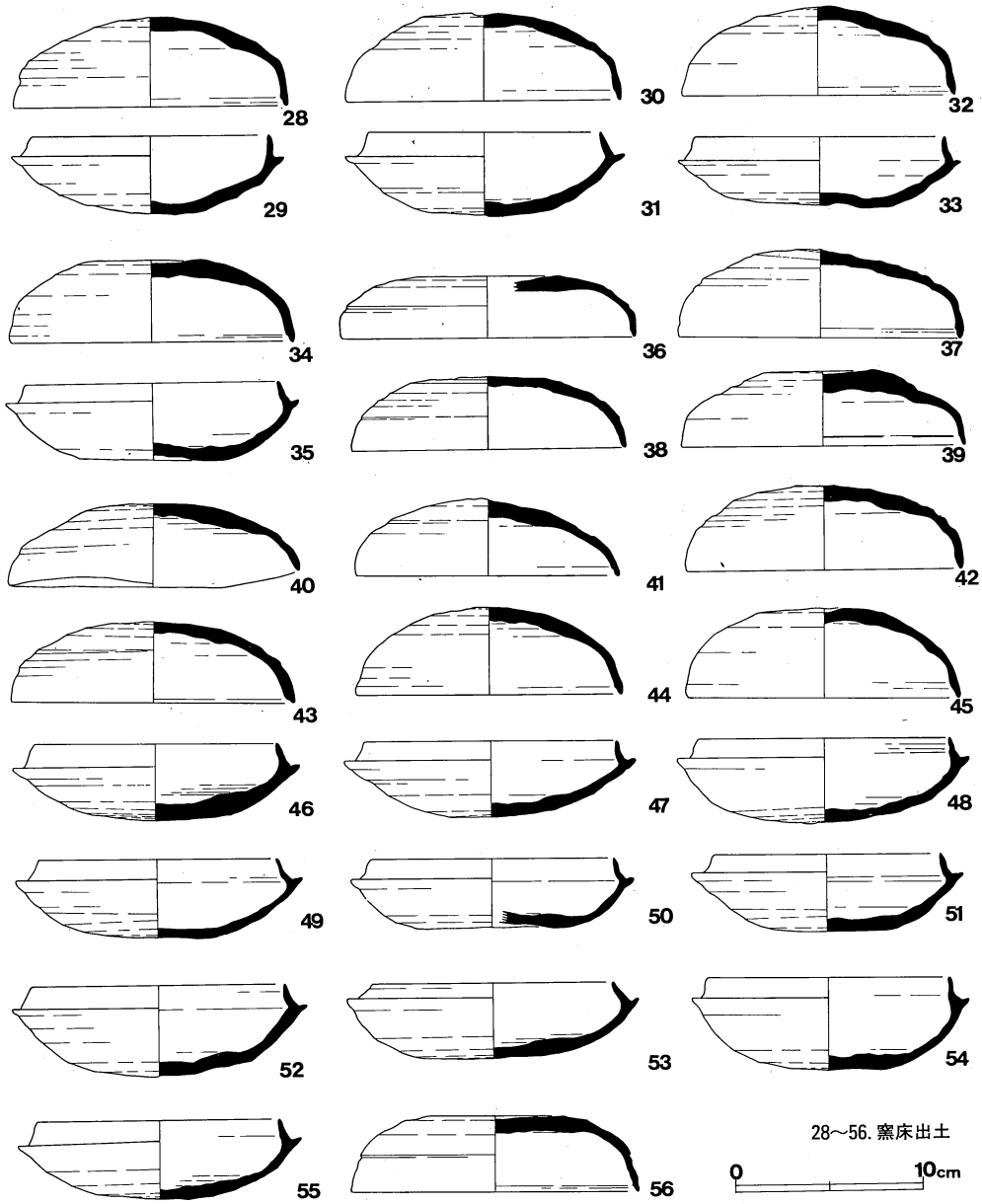
短頸壺用蓋とみられる小型蓋形土器(20)、瑳口縁部(22)、高杯用蓋形土器(23)などがあり、



第 7 図　出土遺物実測図(2)



第 8 図　出土遺物実測図(3)

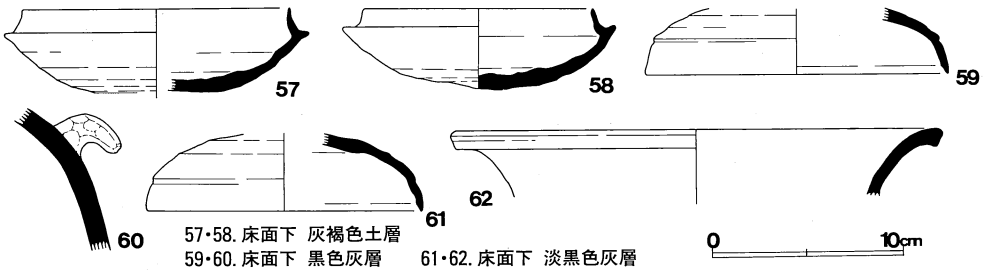


第 9 図　出土遺物実測図(4)

高杯脚端の細片も認められたが、図化できなかった。

瓹口縁部は口縁の屈曲が稜や段などで表現されず、頸部に波状紋がなく、すべて外面カキ目調整を行うやや珍しい資料である。

つまみ付高杯用蓋は、体部全体が新しい形状を示す。口端内面装飾は僅か痕跡程度のこされるが、通常、古相を呈してのこされることの多い外面の稜や凹線などの装飾は完全に消失し、様式上退化が進んだ高杯蓋といえる。



第 10 図　出土遺物実測図(5)

5. 結　　語

既に述べたように、吹田53号須恵器窯跡の発見は土地所有者による通報であった。この原町3丁目は旧原町の集落の北東にあたるが、戦後比較的早くから住宅の開発が行われたところで、本窯の南30m余にある原町陶棺墓の発見は昭和37年4月のことであるから、それ以降断続的に小規模な住宅開発が続き、宅地化した地域である。本窯もそれに前後して何らかの改変を受けたことが調査の所見から明らかであるが、その時期に窯跡の発見が報ぜられていないので、人知れずして破壊が進んだものとみられる。(註1)

通常、窯跡の新規発見は宅地化に伴うものが大半であり、このように20年来宅地化されていた地域で新たな窯跡の発見されること自体珍しいことであり、通報の任を果たされ、以後の発掘調査の便を図って頂いた中田共栄氏に深い謝意を申し上げたい。

さて、本窯の調査報告を行うにあたって、窯の位置、遺構の詳細、遺物出土状況、出土遺物の態様について順次問題点を掘り下げ、最後に千里古窯跡群内の6世紀に展開する窯跡の中で本窯の位置づけを行っていくこととする。

窯の立地

本窯は検出位置からみて、吹田市域の窯跡の中では竜ケ池支群の1基として分類することができる。窯跡の立地していた状況については、周囲が宅地化されていて、旧状を完全に復元することができない。発掘調査の結果検出された窯体は、当初南東に焚口を開口するものと予想していたが、全く逆に北西に向かって焚口を開口するものであった。従って、当地では旧地形は南西へ向かって小さな谷が入り込んでおり、そこへ向かって開口していたことになる。

発掘調査を開始した地点は、現在の府立吹田高校のある大きな谷に望んでいたことは明らかであるから、この53号窯は現在の原愛宕社のある標高40mあまりのピークから、北東に大きく支尾根を伸ばす支丘陵の最先端の舌状部分の西側、標高約22mの低位に窯を構築していることとなる。周辺に展開する46・14・15・37号窯跡等の各窯は谷のより深部、標高35～40mのラインに構築されているのに比して、このように大きな谷へ張り出した舌状台地の突端部に所在す

る窯跡は周辺では少なく、立地そのものが特異であることが判明した。このことについては、本窯が周囲の窯とは異なる経緯で構築されたことを想定できるものであり、後に出土遺物の分析をふまえてその意義を再考する。

遺構について

窯体の検出部は燃焼部から焼成部に及ぼうとする範囲の極めて僅かな部分であったが、この周囲の窯跡は正式な窯体調査の経緯が少なく、また、窯体内からは多くの良好な一括資料を得ることができたことによって、調査の成果は大きなものがあった。

窯体は硬い黄色粘質土層をベースに構築され、砂質土を硬く叩き締めて、第一次の窯床となしている。検出位置が燃焼部の一部であるためにこの床面の被熱は強くなく、焼土面を形成せず炭層が堆積した黒色灰層となっている。

第一次窯床面に属する灰層は3枚が認められ、約15 cmの間層を挟んで、再び二次の窯床面が形成されている。この間層は焼成部に向かってそのまま続いていくことから、本窯は第一次面で何回かの焼成を終えた後、床を全体的にかさ上げし、再度の操業を行ったことが判明した。 窯壁については、第一次の窯床に対応するものは凹凸の激しい塗り壁として残存し、窯床と同様に間層をもって、第二次床面に対応する新しい塗り壁がみられた。このことからも、本窯は途中で大きく修築していることが明らかである。

ただ、この操業の経過に対応する遺物をみると、調査範囲が限られていたこともあって、第一次窯床期からは豊富な遺物は検出できず、層位的にみると、出土遺物の大半は第二次の窯床期に伴うものであった。

須恵器の出土状況は、窯体内としては多い方であった。窯壁側に片よせらている例も多く、窯出しの際に焼成不良品として片方へよせられた蓋杯については、数点が身と蓋が合わさったままであり、その双方の焼成度合が同等であることから、これらのセットは窯詰め時にセットとして積み重ねられていたことがわかる。

出土遺物の検討

出土した遺物を器種別にみると、蓋杯・高杯・瑳・提瓶・横瓶・壺・甕などが見出されるが、数量的な観点からみると蓋杯が圧倒的な比率を示し、本来大量に認められるはずの甕が少なく、さらに壺・瑳・高杯・提瓶・横瓶等については1～数点に限られるなど、著しい特性を示す。これは、今回の発掘部分が窯体内のごく一部を掘ったのみという特異性に依るところが大であると思うが、最終焼成は大半が蓋杯であった可能性もある。以下、蓋杯を主体に本窯の操業期の検討を試みよう。

本窯検出の蓋杯は、我が国で生産が始まってから、5世紀代保たれてきた古式の蓋杯の基本形が6世紀の通有の蓋杯に変遷した直後の形態を有するものであり、その変遷の一つの経過を示す一括の遺物群として捉えることができる。5世紀代の蓋杯は6世紀になると、杯蓋にみら

れた体側部と天井部との界部をなす段が消失し、装飾性を失った形態になることは全国の須恵器の変遷で共通した変化である。その相対時期について、中村浩氏は陶邑窯の編年試案で、「きわめて形骸化した稜が付されているのみ。」の段階をII型式第2段階（以後II－2と記す。）として捉え、その稜の完全な消失期をII－3段階と認識しているから、本窯の操業期は陶邑窯に対応させるならばII－2～II－3段階と比定することが可能である。杯身や横瓶、あるいは大型の提瓶など、他の器種の形態に対応させても、この型式観は支持されるものである。このことを認識した上で、蓋杯各部位の細部について窯内の層位的な秩序に照らし合わせて考えてみる。

まず、杯蓋の天井との界部をなす稜をみると図化された資料のうち、半ばは稜やその痕跡はなく、半ばは何らかの遺性を残存している。このことから型式的には、本窯の操業期はII－2段階とII－3段階のちょうど過渡期といってさしつかえない。ただ、何らかの古い痕跡を残すものについても、一定の定形式があるわけでもなく、きちんと天井部と体側部の屈曲ラインを界する表現となっているものから、特に天井部との界部を表現せず単に凹線が走るのみであるもの、凹線も幅広いものから、細い軽い凹線となったものまで、その態様は各個体に差が認められる。中にはこの装飾が全周に巡らず、途中で消失するものもあり、装飾としての施文意識は極めて弱い。

次にこれらの新旧様式の蓋杯が、53号窯の全体の操業期の中でどう現れているのだろうか。先に窯床構造の分析の中で、本窯は大きく2つの窯床期があることを明らかにした。そのうち前段階のものは検出資料は少なく分析に苦慮するが、少なくとも最下層の段階で既に全く外面装飾を持たない杯蓋が、明瞭な肩部界線をもつ資料と共存し、その率も二次窯床期のものとは差を認めない。杯身の受け部の立ち上がりをみると、図示した資料ではその差が広く認められるが、最下層のものから上層に向かって、漸次低くなる傾向は特になく、最下層の最古の操業期の製品と考えられる資料でも、立ち上がりが低く退化したものが認められた。

このような所見をみると、本窯の操業期に間隙期はなく、継続してまとまって操業が行われたことと想定できるが、それ以上にこのII－2・II－3段階の蓋杯の型式遷移は、新旧タイプの双方が同時に製作された時期がいくらかの期間存在することを明確に示している。この状況を形態的な系譜論から想定すると、外部稜線の退化と凹線化が製作・施文意識の中で急速に進むなか、同時に無文様式の蓋杯が存在したことを示している。これは型式段階の細分で、中村氏の示した「型式のダブリ」の姿であろうが、そのダブリは、旧型式の形態が安定を失い、徐々に新型式に取って替わる姿ではなく、旧型式がはっきりとした施文意識を失った不安定さの中で、新しい型式が明確に完成された型式として既に存在していることを示している。

問題はこの重複する期間はどの程度の実年代幅かであるが、53号窯の全操業期間、すなわち二次にわたる窯床期の実態は、窯体断面に現れた窯床・窯壁の改修の程度からみて、数年以内という短かさではないだろうから、かなりの期間とみるほかあるまい。

53号窯跡の占める位置

最後に、本市に展開した窯跡群の中での本窯の位置を示してみる。本窯については、6世紀代の窯跡でも比較的古様を呈する資料を認めるわけであるが、それでも、周囲の20・40・37号窯跡などに比べて後出的な要素をもつ。本窯と近いタイプの窯としては、西南方 250mに存在する14号窯跡があり、甕の口縁形態が酷似している。(ＳＴ－14, No.37)おそらく同時期の窯といえるだろう。ただ、この14号窯跡は原町の馬池支群の中でも大きく奥入ったところにあり、その立地は本窯と全く異なっている。ここに、先に別途考えなければならないとした理由が存在する。一般的に大きな谷の入口近くの平野部への接点に築かれる窯は、地域の中でも初現的な窯であり、順次谷の奥へ生産が伸びてゆくことは、陶邑窯のＴＫ73(註2)や、尾張の東山窯(註3)で解明されているとおりである。かかる観点から本窯も、やはり小支群における初現期の窯(註4)と理解したい。一般的に吹田市域の6世紀代の窯は32－Ｂ窯を最古として、東へ展開してゆくことが判明している。その一脈が先に述べた20・40・37号窯跡のようなII－1～2段階の間に順次成立したもので(註5)、その展開は馬池支群の展開として、14号窯に至るのである。ところが、この周囲の燃料を使い果たした段階で、さらに谷の奥部へ進むか、あるいは再度平野部へ出直し、新たな支群の形成が始まるのである。本窯は、このような観点から操業地域を北東へ移し、現在の竜ケ池を擁する谷を確保し、新たな陶山の伐採を始めた初現期の窯とみたい。同じ観点でみると、本窯のさらに北方、平野部の入口に立地する29号窯はさらに釈迦ケ池を擁する谷を確保すべく、新たな段階へ至った初現期の窯であり、その時期は出土遺物からII－4段階といえる(註6)。このように53号窯跡の発見は、本市の6世紀代の生産開始期の実態から、さらに北東へと展開してゆく窯の実態を典型的に示す指標として位置づけられるものであり、調査の規模は小さいもののその成果は充分なものがあった。

註1) 網干善教編『吹田市史第8巻』(1981)
註2) 鍋島敏也・藤原　学『千里古窯跡群』(1974)
註3) 田代克己「高蔵第73号窯」『陶邑III』大阪府教育委員会 (1978)
註4) 斎藤孝正「猿投窯成立期の様相」『名古屋大学文学部研究論集　史学29』
註5) 藤原　学「須恵器生産から瓦生産へ—古墳時代須恵器生産から瓦生産への推移に関する一考察—」『歴史考古学を考える』帝塚山考古学研究所 (1987)
註6) 鍋島敏也・藤原　学『千里古窯跡群』(1974)

第３章　吹田城跡推定地の発掘調査

1.　調査の経過

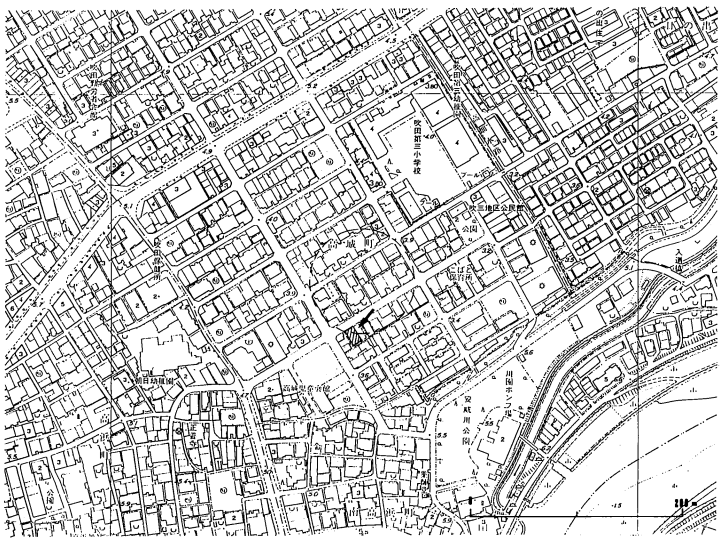
吹田城跡推定地における調査は、吹田市高城町1357番、他において個人住宅の建設にともなう事前調査として実施した。調査は平成元年11月20・21日に２×２ｍ（Ｔ１）、及び２×４ｍ（Ｔ２）の調査トレンチを設定し、重機によって表土層を掘削後、人力による層位発掘を実施した。

2.　調査の成果

調査地の現在の地表面は標高3.9ｍを前後し、土層序はＴ１、Ｔ２ともほぼ同様であり、現代の盛土(１)・旧耕土層(２)以下、現地表下1.4～1.9ｍまでは褐色砂層(６)・暗灰色粘土層(７)・黄褐色粗砂層(８)・暗灰褐色砂層(９)・黒灰色粘土層(10)等の堆積が認められ、近代から現代にかけての陶磁器、ガラス等が出土する。褐色砂層(６)下層の暗灰色粘土(７)・(16)以下の粘土層、及び粗砂層は西側へ落ち込むような堆積状況を示し、各堆積層は軟質で含水率が高く、特に、現地表下1.3～1.7ｍで認められる黒灰色粘土層(10)は植物遺体が多く認められる。土層序の状況から、灰色粘土層堆積時以前の堆積層は低湿地における堆積層と考えられ、一帯が低湿な地域であったと考えられる。

また、褐色砂層(６)から上層については状況が下層と異なり安定した状況を示し、この段階で低湿地が人為的に埋められた可能性が考えられる。

現地表下1.5～2.0ｍで確認された灰色粘土層(12)以下については、遺物の出土は認められなかったが、やはり植物遺体を多く含んでおり、低湿な状況であったことを示している。

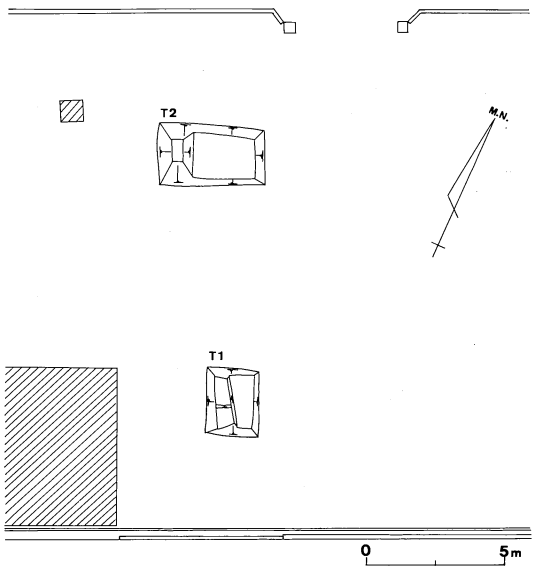


第 11 図　吹田城跡・推定地周辺図

3.　ま　と　め

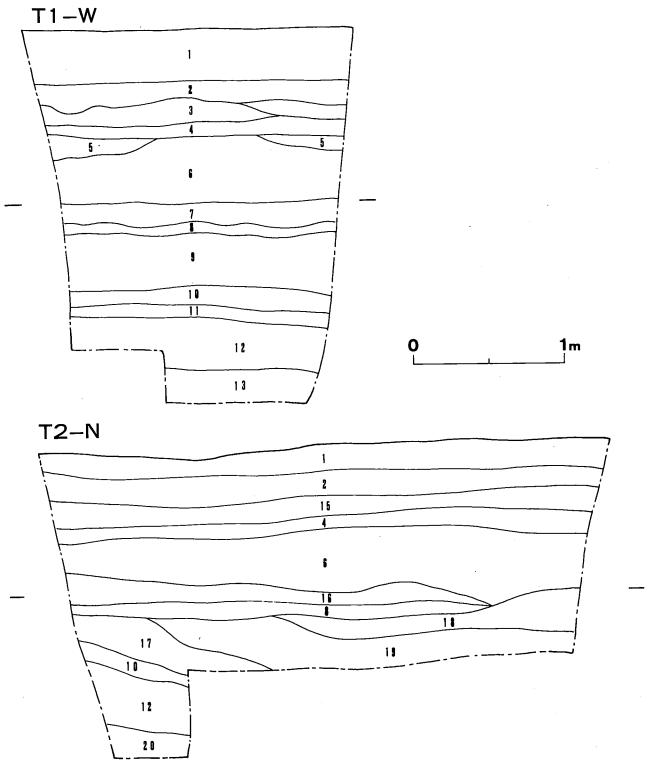
今回の調査では、遺構、及び明確な遺物包含層は認められず、吹田城跡につい

ての考古学的な所見は得られなかった。灰色粘土層(12)から遺物の出土が認められなかったことから時期は断定できないが、調査地一帯は近世以前は沼沢地状の低湿地であったと考えられる。従って、吹田城に関連する遺構が存在する場合は、今回の調査地の東方の微高地上に展開していることが予想されるが、詳細については今後の一帯の調査を待たなければならない。



第 12 図　調査区平面図

1．盛　　土
2．旧　耕　土
3．灰色粘土
4．黒色砂質土
5．茶褐色砂
6．褐　色　砂
7．暗灰色粘土
8．黄褐色粗砂
9．暗灰褐色砂
10．暗灰色粘土
11．黄褐色粗砂
12．灰色粘土
13．灰色細砂
14．黒灰色シルト
15．褐色砂質土
16．暗灰色粘土
17．褐色粗砂
18．黒灰色粘土
19．黒灰色粘土
20．灰色粘土



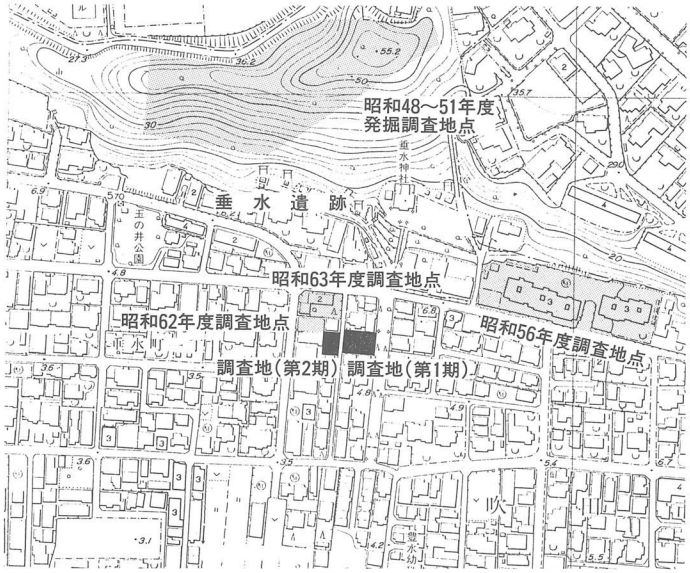
第 13 図　土層断面図

第４章　垂水遺跡の発掘調査

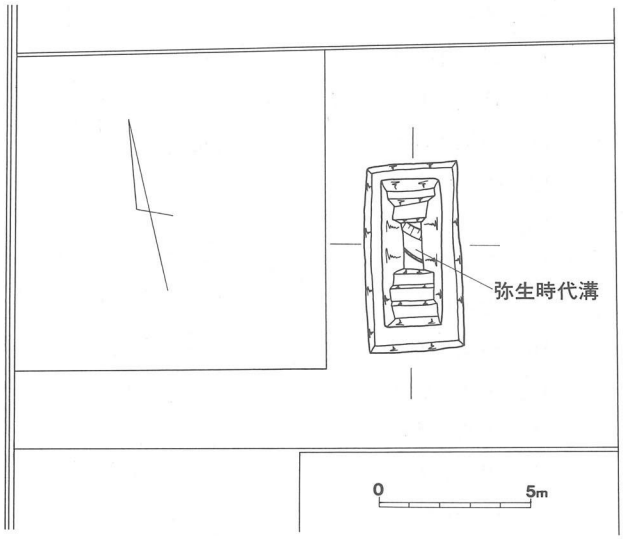
１．　垂水町１丁目747―８における発掘調査（第１期）

(1)　調査の経過

発掘調査は平成２年１月８日から１月20日にかけて、吹田市垂水町１丁目747―８に対して実施した。今回の調査は当地の個人住宅建替えすることに伴って、事前に発掘調査を実施したもので、平成２年１月８日から開始した。調査は工事予定部分を対象にして、南北方向３ｍ×６ｍの長方形の調査区を設定した後、重機によって現代の盛土、表土層等を掘削し、以下は人力によって分層発掘を行った。調査面積は18㎡である。その結果、地表下約1.2 ｍで中世期の落ち込む面があり、落ち込む方向に沿って３本の杭によって構成された杭列が認められた。これらを記録に止めた後、さらに掘り下げると地表下約2.6 ｍで弥生時代の溝を検出した。溝の中からは弥生中期～後期の良好な土器が出土した。この溝は部分的な確認にすぎないが、弥生時代のものとしては垂水遺跡の丘陵下の調査で初めて検出され

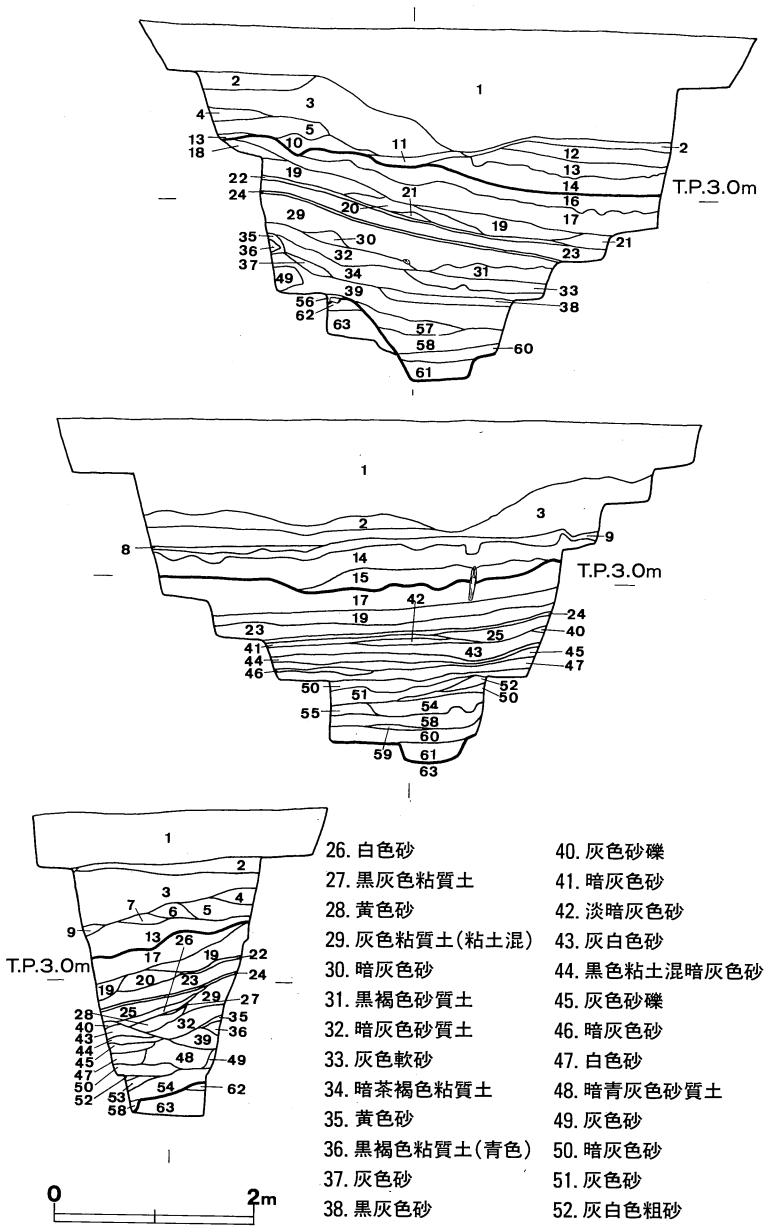


第 14 図　垂水遺跡調査地周辺図（1：5000）



第 15 図　垂水遺跡調査区平面図

た遺構である。これら遺構の断面・平面図・写真撮影等の記録作成を行った後、埋め戻しを行って１月20日すべての調査を終了した。



1. 現代盛土
2. 表土
3. 淡晴青色砂質土
4. 灰褐色砂質土（下より淡い）
5. 灰褐色砂質土
6. 白色砂
7. 褐色砂質土
8. 淡灰色砂
9. 灰白色砂
10. 暗灰色砂質土
11. 灰色砂質土
12. 灰色砂質土
13. 灰色砂質土
14. 茶褐色粘質土
15. 淡黒褐色粘質土
16. 黒褐色砂質土（硬質）
17. 黒褐色粘質土
18. 黄白色砂
19. 灰白色砂礫
20. 灰色細砂
21. 灰色砂
22. 暗灰色細砂
23. 灰色細砂
24. 黒色粘土
25. 暗灰色砂
26. 白色砂
27. 黒灰色粘質土
28. 黄色砂
29. 灰色粘質土（粘土混）
30. 暗灰色砂
31. 黒褐色砂質土
32. 暗灰色砂質土
33. 灰色軟砂
34. 暗茶褐色粘質土
35. 黄色砂
36. 黒褐色粘質土（青色）
37. 灰色砂
38. 黒灰色砂
39. 黒灰色砂質土
40. 灰色砂礫
41. 暗灰色砂
42. 淡暗灰色砂
43. 灰白色砂
44. 黒色粘土混暗灰色砂
45. 灰色砂礫
46. 暗灰色砂
47. 白色砂
48. 暗青灰色砂質土
49. 灰色砂
50. 暗灰色砂
51. 灰色砂
52. 灰白色粗砂
53. 灰色細砂
54. 暗褐色粘質土
55. 暗褐色粘質土（砂混じり）
56. 暗灰色砂質土
57. 淡黒色粘質土
58. 黒色粘質土（包含層）
59. 灰色砂
60. 暗灰色砂
61. 灰色細砂
62. 暗灰色粘質土
63. 暗灰色粘土

第 16 図　土層断面図

(2) 調査の成果

(a) 土 層 序

当調査区の基本的な層序はⅠ層・盛土（現代）、Ⅱ層・暗青色砂質土（旧耕土、現代水田）、Ⅲ層・灰白色砂，茶褐色粘質土，淡黒褐色粘質土、Ⅳ層・黒褐色砂質土，粘質土、Ⅴ層・灰白色砂礫、Ⅵ層・暗灰色砂，灰色砂、Ⅶ層・暗灰色粘土である。

Ⅰ層は現代の盛土層で、その上面は標高Ｔ．Ｐ．4.3mに位置し、Ⅱ層は現代の水田耕土層である。Ⅲ層は遺物はほとんど検出されておらず、時期は不明であるが、層序的にみて中世～近世期の所産であろう。Ⅳ層は中世期の堆積層で、この層をベースにして南西方向へ傾斜する落ち込みが認められた。Ⅴ層は層厚約20 cm の遺物包含層で、弥生土器が多量に出土したが、磨滅が著しく周辺からの流れ込みか再堆積層である。Ⅵ層は砂層と砂質土が幾層にも堆積したもので遺物は少量であるが布留式土器の細片を含んでいる。Ⅶ層は部分的な掘り下げであるが、この層からは遺物の出土が認められず、文化層ではないと判断される。なお、この層をベースにして弥生時代の溝が形成されている。

(b) 遺　　構

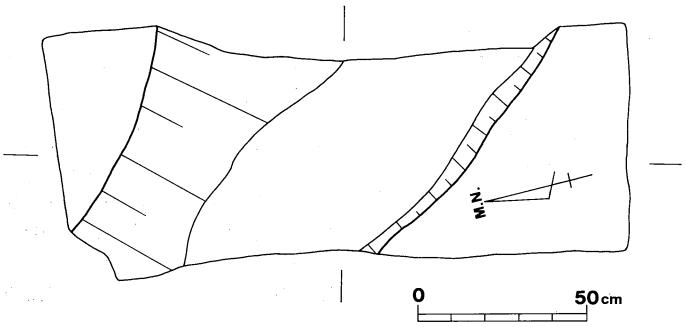
今回検出した遺構として中世期の落ち込みと弥生時代の溝が挙げられる。

〔中世期の落ち込み〕

Ⅳ層をベースとして調査区の南西方向に向かって傾斜する落ち込みで、その方向はN－26°－Wである。この方向に合致するように３本の杭が打ち込まれており、落ち込みと有機的な関連をもつものと思われる。杭は一直線に並ぶが一定の間隔をもつものでなく、1.45m、0.55mとばらつきがある。堆積土層は茶褐色粘質土で中世期の遺物が含まれ、当該期の所産と考えられる。

〔弥生時代溝〕

地表下2.6m、Ⅶ層をベースにしたもので、部分的な確認に止まったが、深さ80 cm、底面幅45 cm を測る。溝の方位はN－36°－Wである。溝底は北側が南側より約10 cm 高く、北から南への流れがあったものと考えられる。溝内の堆積土は上から黒褐色砂質土、黒色粘質土、暗灰色砂、灰色細砂であるが、遺物が出土したのは黒色粘質土層である。遺



第 17 図　弥生時代溝平面図

物は弥生中期～後期の土器があり、全て破片であるが磨滅痕が少なく、Ⅴ層で多量に出土した弥生土器と比べても遺存状態は良い。

(c) 出土遺物

今回の調査で出土した遺物は中世期、古墳時代、弥生時代の土器であり、特に弥生土器に良好な資料を得ることができた。ここでは一応、出土層位ごとに遺物を概観する。

(1)黒色粘質土（溝内堆積層）出土〔第18図　1～19〕

出土した遺物は全て弥生土器であり、磨滅痕の少ない良好な資料である。

壺（1～6）

(1)～(3)は外反する口縁部外面に粘土を貼りつけ垂下させたもので、(1)は端面に3条の凹線と2個の円形浮文、(2)は円形浮文と、その上下にヘラ先の刺突文、端面に刻み目、(3)は端面に3条の凹線を施す。(4)は球状の体部をもつ壺の底部で外面は密にヘラミガキを施している。(5)・(6)は長頸壺の口頸部で、(5)は外面口縁下にヘラで「 ↑ 」と記している。外面はタテ方向のハケ・ヘラミガキが施されている。

甕（7～13）

(7)はいわゆる受口状口縁の甕で、口縁部端面には、右上がりの櫛先列点文、端面下部に刻み目、頸部にも櫛先列点文を施す。外面にはススの付着が顕著である。口縁の形態、文様構成から近江系の土器と考えられる。(8)・(9)は「く」の字形に口頸部が外反するもので、(8)では体部外面にタテ方向のハケ、内面頸部にヨコ方向のハケが施されている。

(10)は口頸部が短く外反し、ややくぼんだ口縁端面をもつもので、体部外面は平行タタキが行われ、ススの付着が顕著である。(11)～(13)は底部で、(11)は外面に右上がりの平行タタキが施されている。

高　杯（14～19）

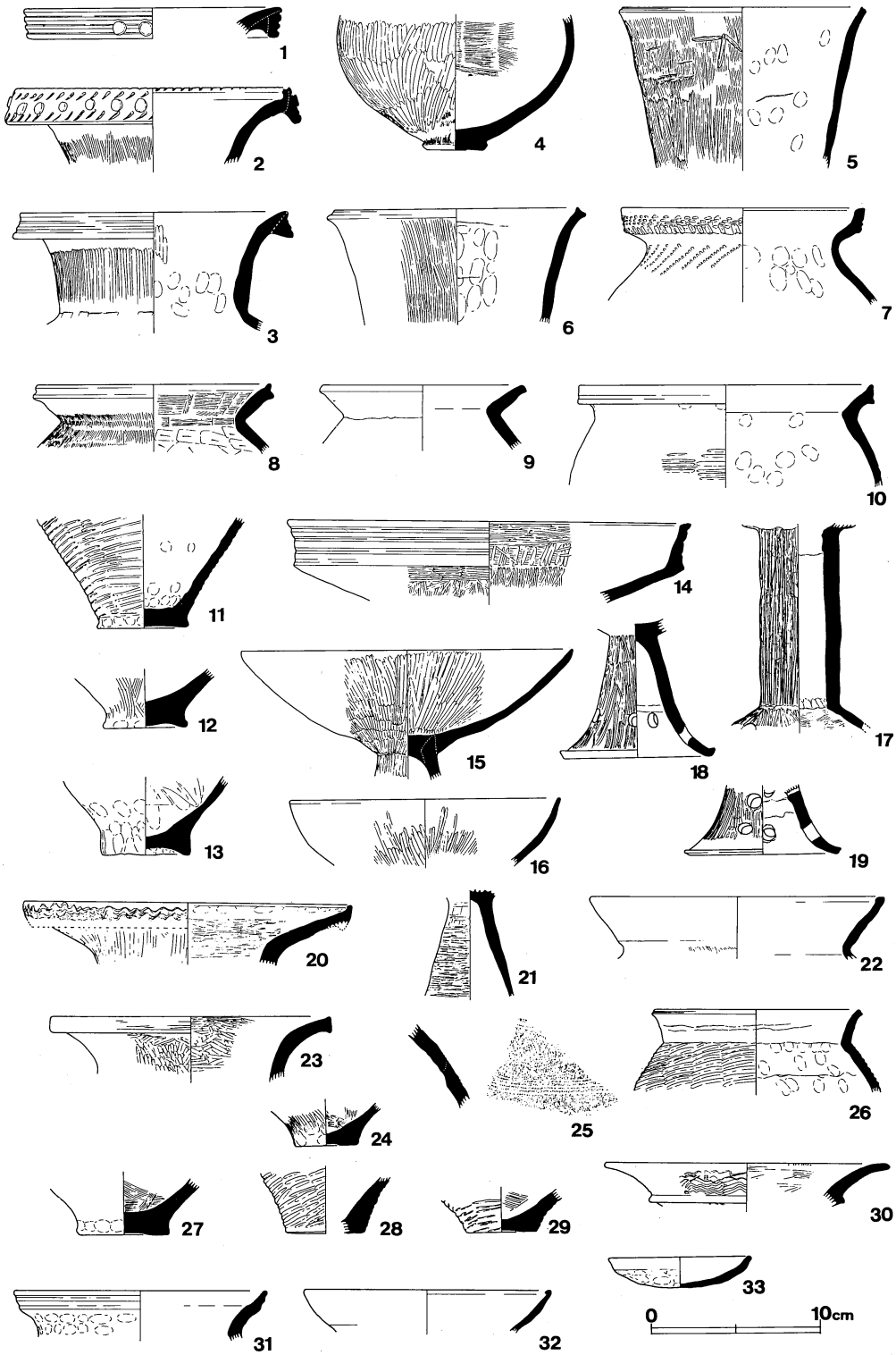
(14)～(16)は杯部、(17)～(19)は脚部である。(14)は外上方へ直線的に立ち上がり、外側端面に3条の凹線を施す。(15)・(16)は内弯気味に立ち上がる口縁で内外面にはタテ方向のヘラミガキが施される。

(17)は円筒状の脚部で裾が大きく広がり、円孔を有する。(18)・(19)はゆるやかに広がる裾部をもち、円孔を穿つ。

(2)Ⅵ層　灰白色砂層出土〔20～22〕

弥生土器、布留式土器が数点出土した。

(20)は口縁端部を軽く上方へつまみあげ、下方にも肥厚させる壺である。端面にはややくずれた櫛描波状文を施し、頸部内面は丁寧にヘラミガキを行う。(21)は布留式期の高杯脚部で外面はヨコ方向に丁寧にヘラミガキを行う。(22)は体部からゆるやかに外反して口縁がのびる布



第 18 図　出土土器実測図

留式甕である。口縁端部はまるめているが、内側の肥厚は明確でない。

(3)Ⅴ層　灰白色砂礫層出土〔23～32〕

(23)は頸部から大きく外反して外側に平坦面をもつ壺の口縁で、端面には粗いハケを施す。内外面とも粗いヘラミガキを施している。

(26)は体部からゆるく屈曲して口縁が上外方にのびる甕である。端部には外側に傾斜する面をもち、体部外面には右上がりのタタキを施す。

(30)は二重口縁の高杯の口縁部で、外面には櫛による雑な波状文が施される。

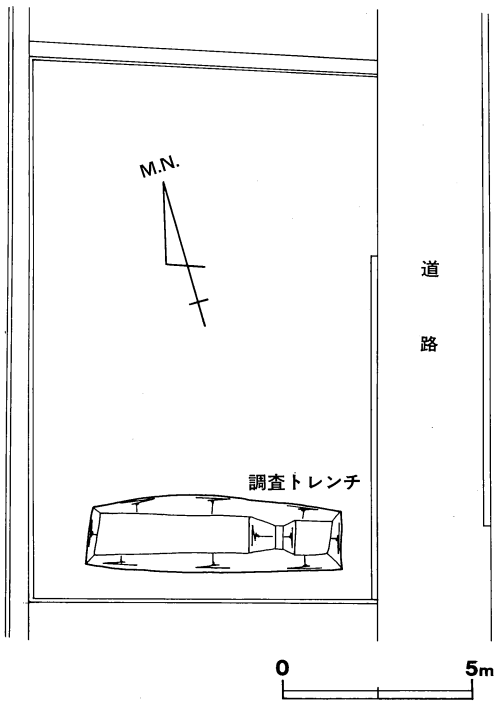
(4)Ⅲ層　茶褐色粘質土層出土〔33〕

(33)は土師質小皿で、口縁部は強くヨコナデを行い、底部外面には指頭圧痕が明瞭に残る。鎌倉時代の所産と考えられる。

2.　垂水町1丁目747－21における発掘調査（第2期）

(1)　調査の経過

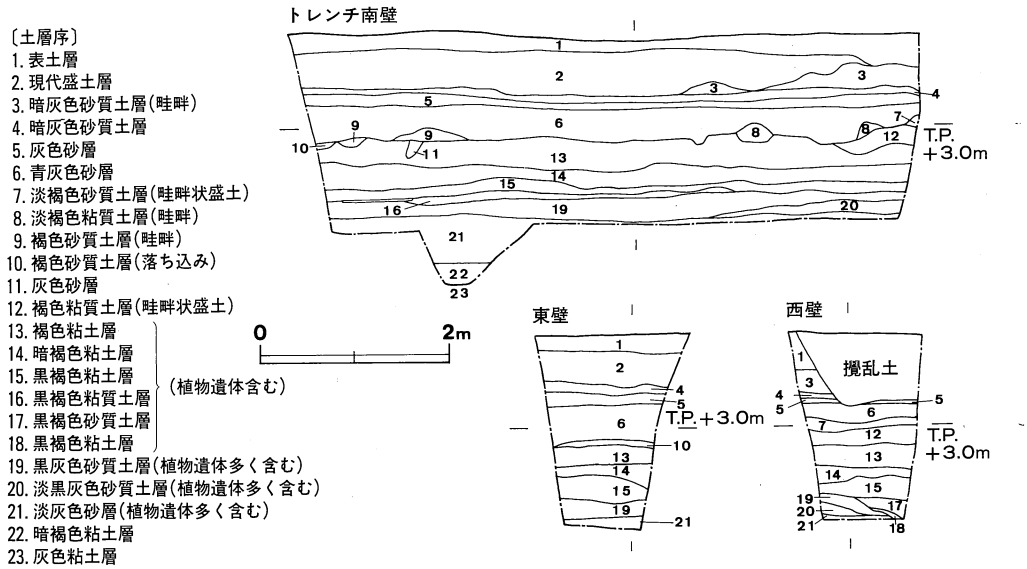
今回の発掘調査は、個人住宅建替に伴う事前調査として、吹田市垂水町1丁目747－21を対象に、平成2年2月9日から同年2月19日までの間実施した。調査は遺構・遺物の包蔵状況を確認するため、工事予定地の南側に1.5m×7mの調査トレンチを設定して、表土層・現代盛土層以下、人力による分層発掘を行った。その結果、現地表下約1.1m（T.P.2.9m）より、褐色粘土層をベースとして、南北方向の畦畔2条等を検出した他、下層の暗褐色砂質土層・淡灰色砂層から弥生・古墳時代遺物、暗褐色粘土層から弥生時代遺物を検出した。そして、これらの遺構・遺物については、慎重に調査を進め、写真撮影、平面図・土層図作成等の記録作業を行ったのち、トレンチを埋め戻して終了した。



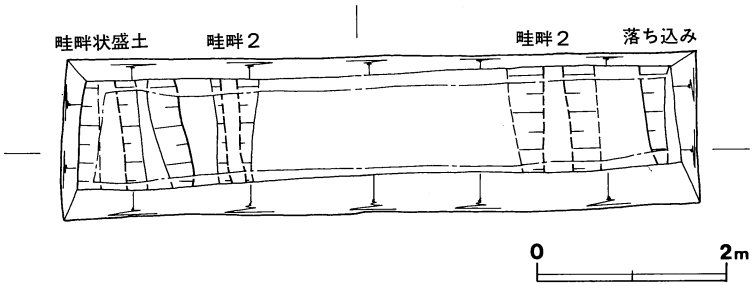
第19図　トレンチ配置図

(2)　調査の成果

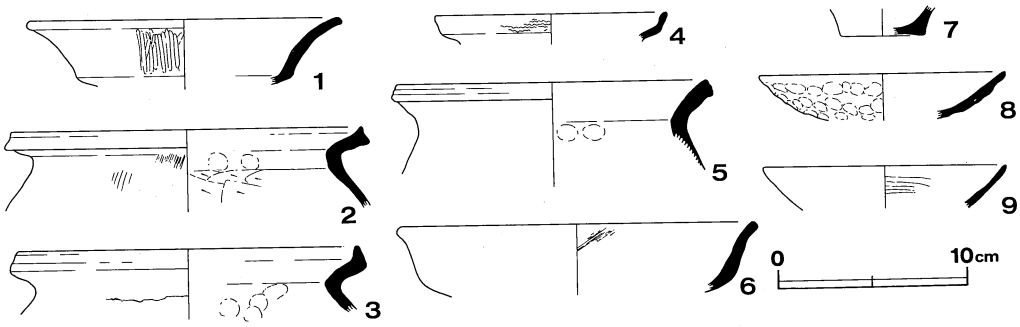
調査トレンチの現地表面は、標高T.P.4.0m前後で、土層序は厚さ50cm以上の現代盛土層以下、砂質土層(3～6)、粘土層



第 20 図　土層断面図



第 21 図　畦畔検出状況平面図



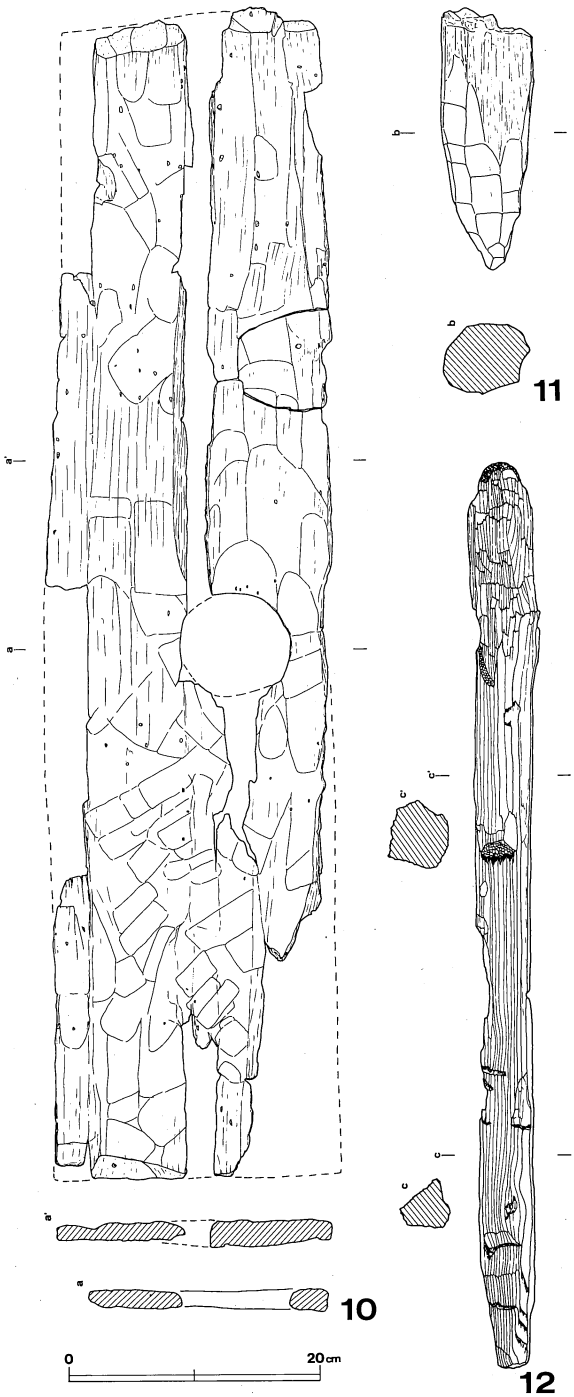
第 22 図　出土土器実測図

(13～16)、砂質土層(19、20)、砂層(21)、粘土層(22、23)の順に平坦な堆積状況を示す。

第14～23層までは、明確な遺構は検出されなかったが、このうち第19～21層では、弥生土器、布留式土器の細片十数点と杭等の木片数点が出土した。また第22層からは、弥生土器、杭等数点を出土した。

第13層からは、南北方向の畦畔２条、畦畔状盛土１条、落ち込み１ヶ所を検出した。まず西側の畦畔１は幅約38cm、高さ約14cmを測り、N－14°－Eの方位である。さらにこの畦畔の西側には、高さ約30 cmの畦畔状の盛土が併走することから側溝を有する大畦畔の一部の可能性がある。また、調査区の東側には、方位N－17°－E、幅約90cm、高さ約18cmを測る畦畔２と浅い落ち込みを検出した。この遺構面からは、土師器の細片をわずかに検出したのみで、時期を明らかにできなかったが、上・下層から中世期の土師皿(8)、瓦器(9)を出土していることから、中世期以降の所産と考えられる。

次に遺物については、弥生時代の土器をはじめ、数十点の土器を出土したが、土器についてはいずれも器表面が磨滅した細片であった。最も多く出土した弥生土器の殆どが甕形土器であり、そのうち実測可能なものとしては、口縁部が受口状になるもの(3)・(4)と、頸部がくの字状に屈曲し端面をもつもの(2)・(5)の４点であった。また中世の土器では胎土が精緻な白色系の土師皿(8)、和泉型の瓦器(9)等数点の出土に止まった。この他、比較的多くの木片を出土したが、建築材ではないかと考えられる板材(10)を黒褐色砂質土層上面から、杭(11)・(12)をそれぞれ淡灰色砂層と黒褐色砂質土層から検出した。



第 23 図　出土木器実測図

3. 結　　語

本年度の垂水遺跡の発掘調査は2期にわたって行われた。それぞれの成果をここで一括してまとめとしたい。

まず、中世期については、第2期調査で南北方向の2条の畦畔が検出された。条里区画に一致する畦畔は、南方に展開する垂水南遺跡で多くの検出例があり、南北畦の方位は、概ねN－14～15°－Eを示す。(註1) 今回検出された畦畔はN－14°－EとN－17°－Eであり、おおよそ条里遺構の方位と合致する。また、昭和62・63年度に実施された垂水遺跡の調査においても同一方位の溝群が検出されており、中世期には垂水地域に条里制に基づく区画された水田があり、安定した水田経営がなされたものと考えられる。

一方、第1期調査で検出された落ち込み遺構の方位はN－26°－Wで、条里畦畔等とは異なる方位を持っており、上記と異なる所見といえる。ただ、この遺構については性格が明らかでなく、むしろ自然地形の可能性もあり、今後の調査に期待したい。

古墳期については、遺構は確認されなかったが、第1期、第2期調査ともに布留式土器が包含層から出土した。従来、垂水遺跡では古墳時代前期の良好な土器の検出が少なく、垂水遺跡は、弥生時代第V様式後半期にピークを迎え、庄内期に至る以前に廃絶したとされている。(註2) 今回検出した布留式土器は細片で少量ではあるが、当遺跡が古墳時代前期にも小規模ながらも継続していた可能性を示す資料となろう。

弥生期については、第1期調査で溝を検出した。その方位はN－36°－W　で、時期が異なるものの、垂水南遺跡の古墳時代遺構の展開方位N－30～40°－Wとほぼ同じであり、自然地形の影響を受けたものと考えられる。溝内堆積層からは、畿内第IV様式を主体とした良好な弥生土器が出土した。昭和62年度調査で検出した包含層出土遺物と似た様相を示すが、第18図壺(5)・(6)、甕(11)のように第V様式に属する遺物もみられ、新しい様相を含むものである。部分的な確認を行ったのみで詳細については明確にできなかったが、丘陵下で初めて検出した弥生期の遺構であり、周辺地で当期の遺構が展開する可能性を示唆するものといえよう。

今回の出土遺物のうち、注目すべき遺物として長頸壺(第18図5)がある。これは口縁外面にヘラ状工具による「 ↑ 」形の記号ふうの文様があり、外面には二次焼成を受けた痕跡が認められる。長頸壺は弥生時代後期に新たに現れた器種であり、大和、中・南河内、和泉等畿内南部に濃密に分布する。記号ふうの文様も長頸壺と同様に畿内南部に集中的にみられ、摂津では例が少ない。記号ふうの文様をもつ長頸壺は、北摂では尼崎市田能遺跡、伊丹市大阪空港A遺跡、茨木市東奈良遺跡(註3)等で類例があり、分布が希薄であるとはいえ、畿内南部の影響が北摂にも波及していたことを示す重要な資料といえよう。(註4)

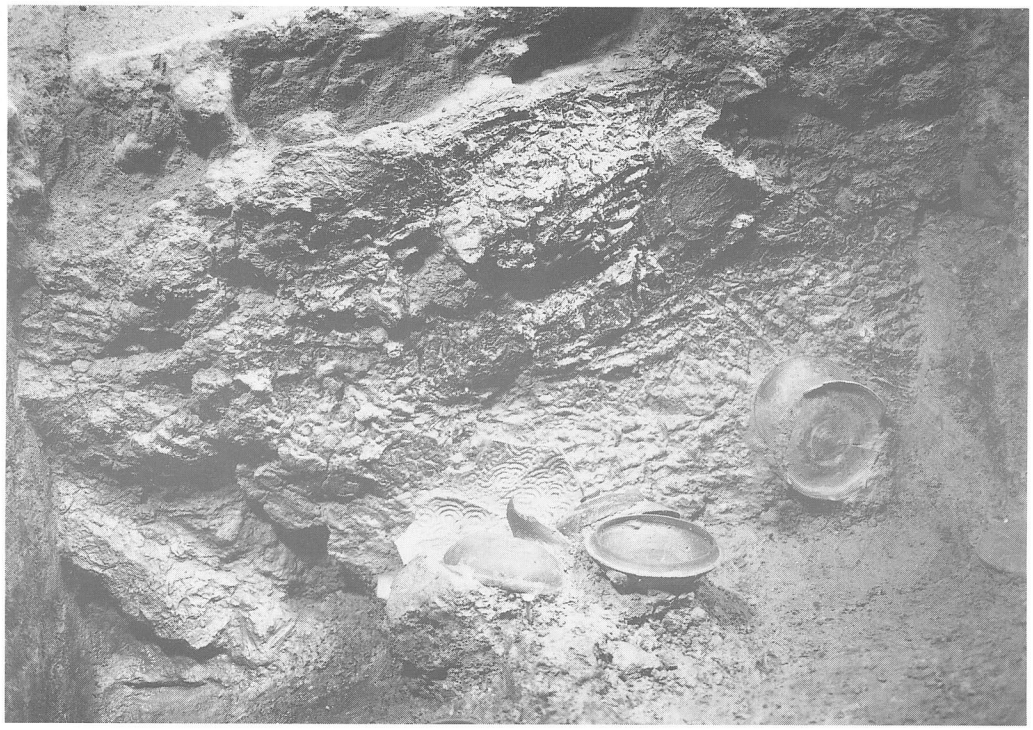
註1)　吹田市教育委員会　『昭和56年度埋蔵文化財緊急発掘調査概報』(1982)
註2)　網干善教編　『吹田市史第8巻（別編）』(1981)
註3)　佐原　真・高井悌三郎「考古学からみた伊丹地方」『伊丹市史第1巻』(1976)
註4)　東奈良遺跡調査会　『東奈良　発掘調査概報Ⅰ』(1979)

図版一　吹田53号須恵器窯跡

調査前近景（南から）

窯体内遺物検出状況（北から）

図版二　吹田53号須恵器窯跡



窯壁検出状況（西から）

遺物検出状況細部（西から）

図版三　吹田53号須恵器窯跡

南壁土層断面

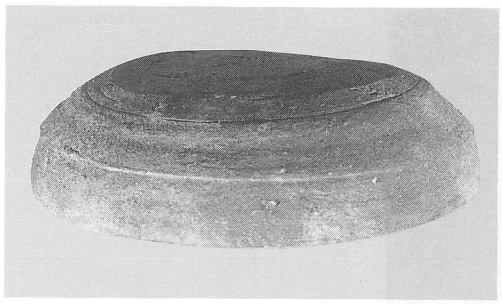
北壁土層断面

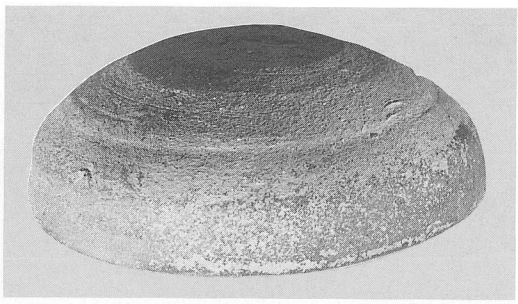
図版四　吹田53号須恵器窯跡

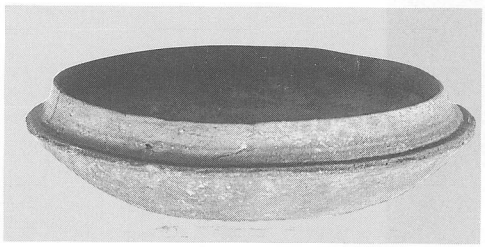
床面断ち割り状況

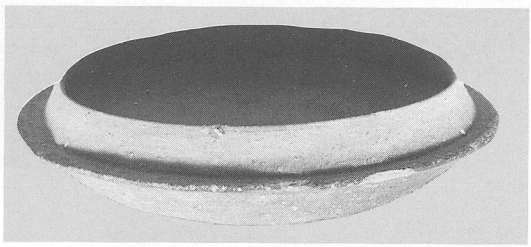
現代攪乱坑

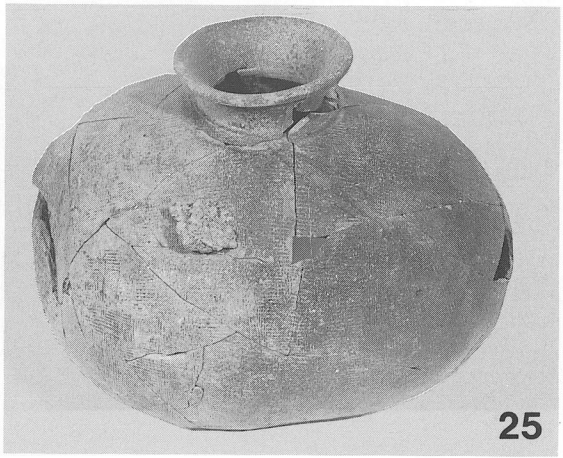
図版五　吹田53号須恵器窯跡出土遺物

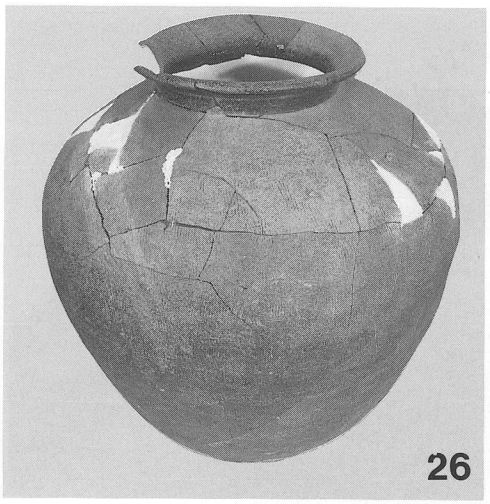


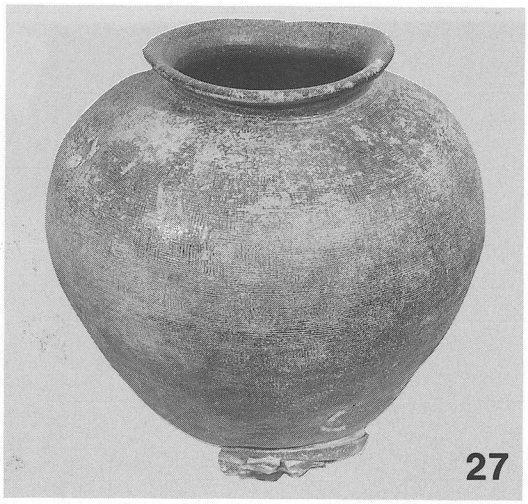












図版六　吹田城跡推定地

T1 土層断面(北面から)

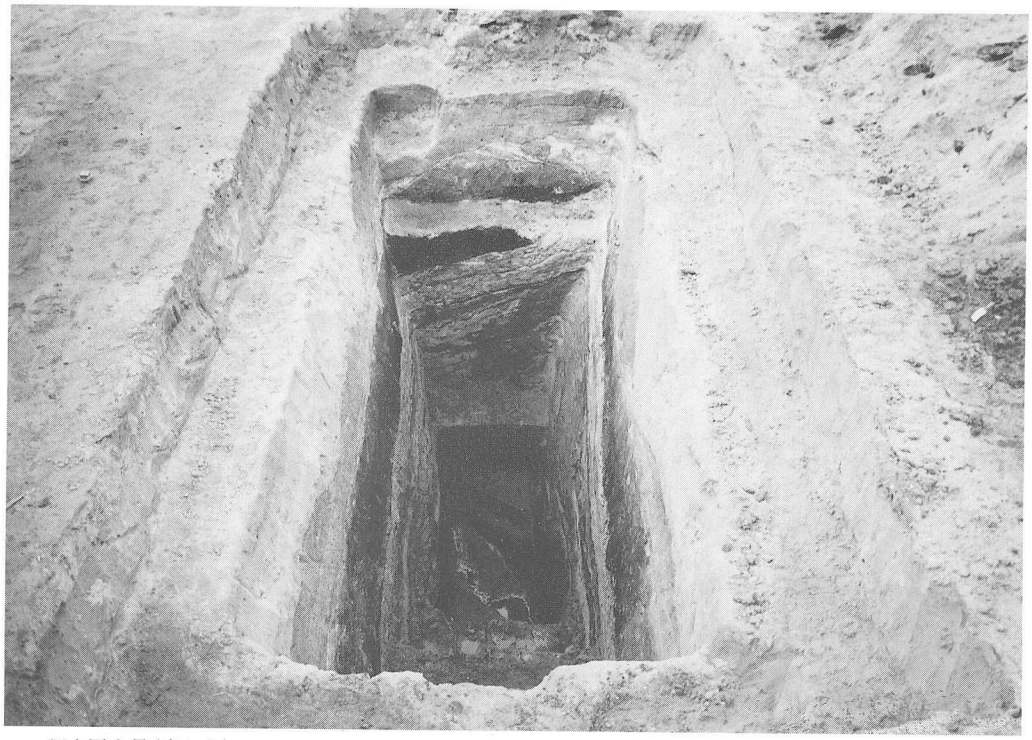
T2 土層断面(北東から)

図版七　垂水遺跡（第1期）

調査前近景（東から）

中世期落ち込み検出状況

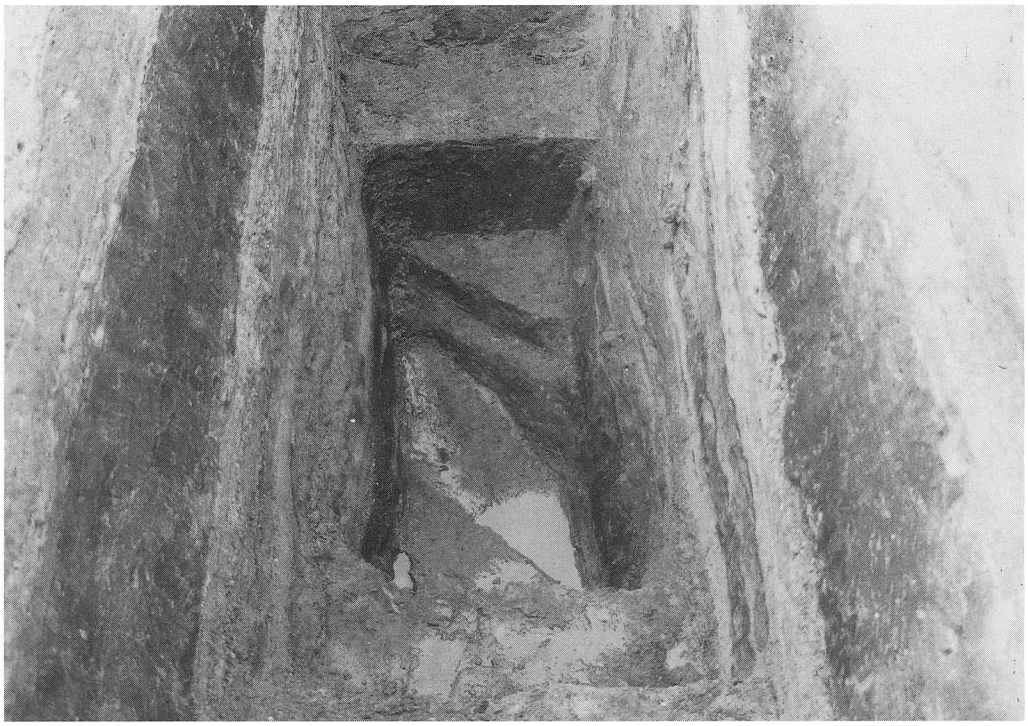
図版八　垂水遺跡（第1期）



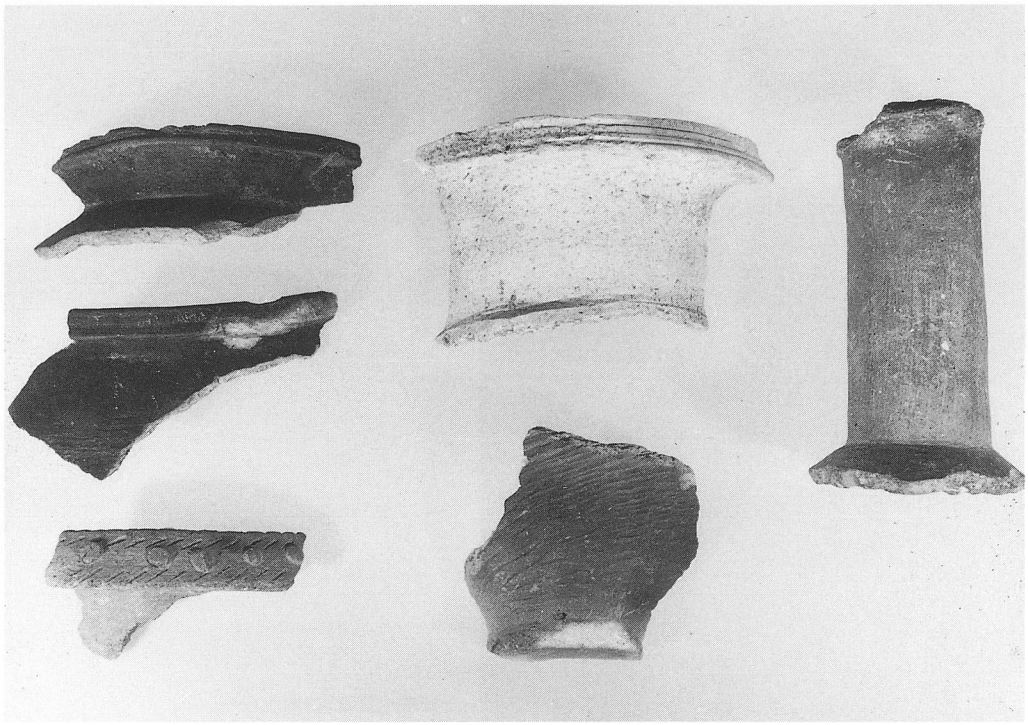
調査区全景（南から）

調査区土層断面（北西から）

図版九　垂水遺跡（第1期）

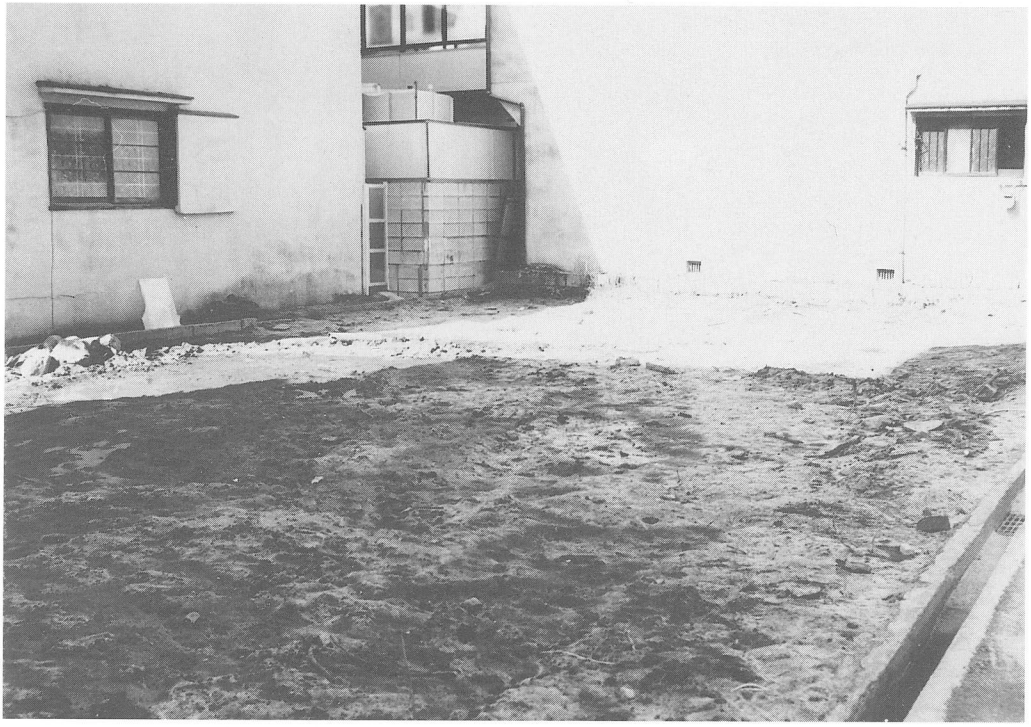


弥生時代溝検出状況



出土遺物

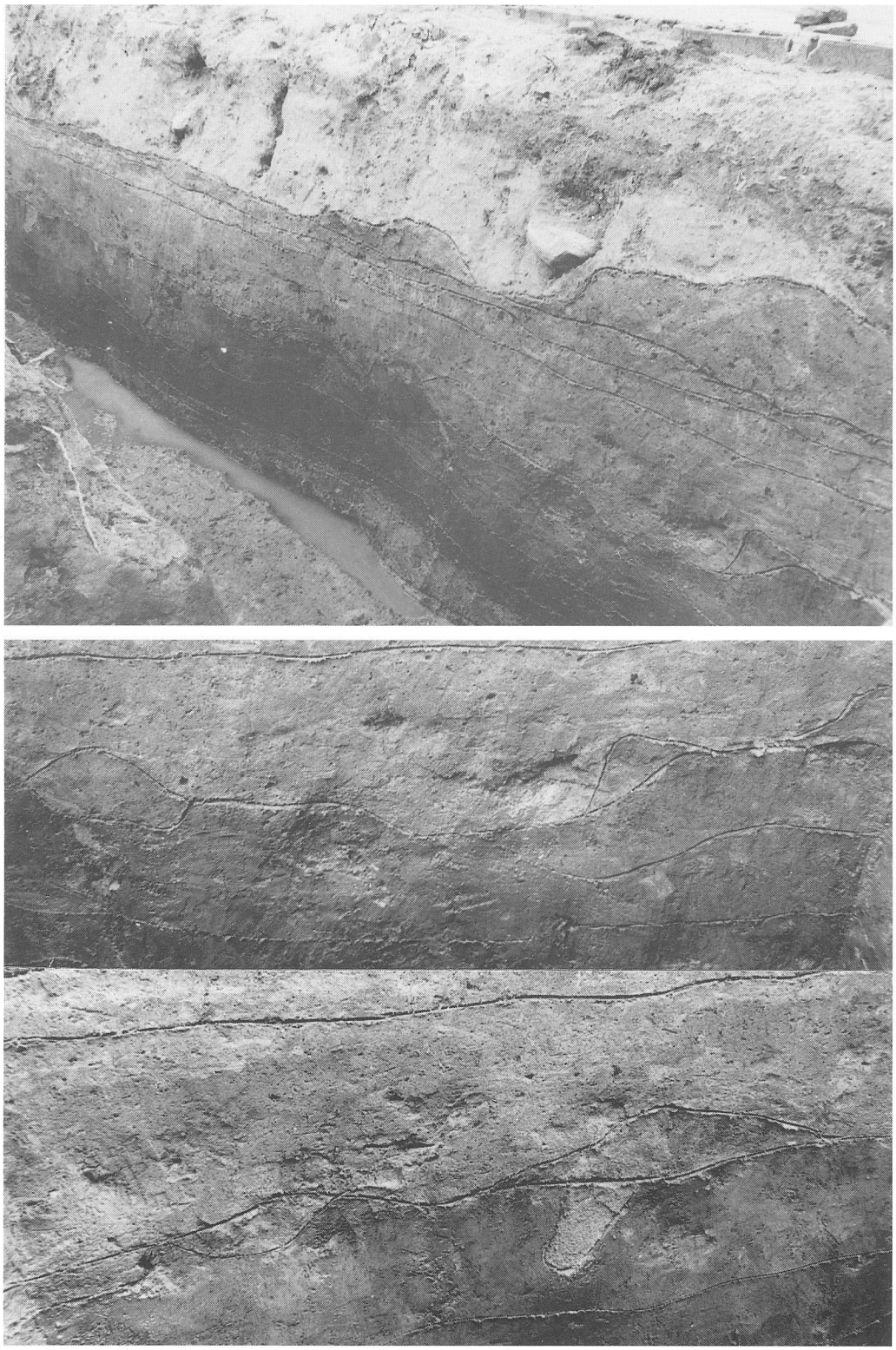
図版一〇　垂水遺跡（第2期）



調査前近景（南東から）

畦畔検出状況（西から）

図版一一　垂水遺跡（第2期）



上：南壁断面　　下：南壁断面細部

〔平成元年度〕

埋蔵文化財緊急発掘調査概報

吹田53号須恵器窯跡
吹田城跡推定地
垂水遺跡

平成2年3月30日

編集　吹田市泉町1丁目3番40号
発行　吹田市教育委員会